# 名探偵コナン～キッドｓｉｄｅ～２

ペロコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
名探偵コナン～キッドｓｉｄｅ～２

【Ｎコード】
Ｎ０２７１Ｅ

【作者名】
ペロコ

【あらすじ】
これは、怪盗キッドから見たコナンとの戦いです。原作と合わせてお読み下さい。なお、自分の読みたい話だけ読むのも１つの読み方だと思われます☆「空中歩行」は無事完結！ありがとうございます☆現在、「銀翼」を連載中。書け次第投稿するので、更新は不定期になります。目標は１週間置き程度なんですが……☆映画シーンは少しずつ進んでおります。快斗さんとコナンくんの接触完了！☆では、楽しんでいただけたら嬉しいです（＊＾ー＾＊）☆誠に勝手ながら、執筆を停止させていただきます。詳しくは最終更新話にて。

復活は夏を予定しております☆

## 再開の挨拶

ＰＯＭ☆

こんにちは。ようこそいらっしゃいました。怪盗キッドといいます。

まず、初めましての方々へ。

この小説は私、怪盗キッドの視点で進む、小さな探偵くんとの対決のお話です。

よって、私の一人称となります。

原作や映画に基づくため、会話はそれらと重なることになります。

もちろん、全く一緒というわけではありません。

注意していただきたいのが、これは私サイドで進みますので、いわゆるネタバレ形式となります。

私の華麗なるマジックのタネなど、分かってしまうと面白くないと思われる方は、お気をつけ下さい。

また、以前までのものを読んでも読まなくてもどちらでもかまいません。

ですが、一応流れというものは存在しているので、軽く読み流し

はしてもらったらいいかなと思います。

もちろん、量もありますし、強制はいたしません。

以上、これらがこの話を読む（聞く）うえで知っておいてほしいことです。

そして、以前お会いしたみなさまへ。

お久しぶりですね。またこうしてお会い出来たことを大変嬉しく思います。

前回、ペロコの事情により突然「完結」という状態になった際、たくさんの方々から『続けてほしい』とのお声をいただき、ペロコともども本当に幸せに思いました。

一時は、本当にもう続きは書かないとペロコも考えていた時期がありました。

こうして再開という結論に最終的に達したのには、読者の皆様からのたくさんのお声のおかげと思っております。

改めてありがとうございます。

今回、どこまで続くのかは分かりません。
私の活躍は今なお続いておりますのでｖ
それに、今後ペロコの生活状況がどうなるのかも分かりませんので。

もし、再び終わりという事態になってしまった際は、申し訳ありません。
先に謝っておきます。

さて、前置きばかりが長いのもいかがなものかと思うので、このあたりで失礼します。

今回は、前回の続きから始まるので、あのお話からスタートいたします。
最初に申し上げた通り、ネタバレ形式で進んでいきます。

それではまたお会いしましょう。
最後までどうぞお楽しみ下さい。

P
O
M
☆

## 再開の挨拶（後書き）

【しっかり再開させていただきました♪】
みなさま、こんにちは。ペロコです。
久しぶりに『名探偵コナン～キッドｓｉｄｅ～』を書きました。パート２です！
タイトルにはほとんど変更点をつけませんでした。ややこしいかなぁ……？

本当にたくさんの方からコメントをいただきまして、嬉しかったんです。
終わった時も、すごい反響が返ってきて、かなり驚きました。
再びこうして「挨拶」が出来ることが嬉しく誇らしく思います。ありがとうございます！

本文でも言った通り、生活状況が今までと確実に違いますので、更新スピードが未定です。
どうなるか分かりません。
でも、そんな不確定な状況だからこそ、こうして投稿しておいたら「書かなければ」という思いができるのではないかと思いまして。

たくさんの方々に読んでもらって、楽しんでいただけたらいいなと思います。
久しぶりの一人称小説は、少々緊張しますね（笑）
ではでは、これからもよろしくお願いします！

## 空中歩行１

爽やかな風が吹き抜ける秋の日の朝、オレはヒマだった。

ヒマ、ヒマ、ヒマ……。いくら言い続けても、ヒマなことに変わりない。

世間を騒がせる確保不能といわれる怪盗キッド――つまりオレ――は、近頃休業中だった。

目ぼしいビッグジュエルの展示もなく、毎日変わり映えの無い日を過ごしていた。

鳴り響くチャイムの音に重なるように、

「はい、始め」

という先生の声が耳に入り、オレは配られた紙を表に返す。

――――世に言う中間テストだ。

ＩＱ４００という天才的な頭脳の持ち主のオレには、高校のテス

トなんざ、問題を解いたっていう気持ちにすらさせてくれない。

数学２・英語２……。今日のテストの時間割だ。

一般には、最悪の組み合わせと嘆くところだが、数学はパズルみたいなもんだし、オレは英語ぺらぺら。どころか、中国語・フランス語……と話せるオレに、英語の問題なんて、ありえねー。

今日も始まって１０分で全てを解き終わり、問題用紙の裏に暗号ネタを作っておく。

テスト時間中の唯一のヒマつぶしだ。

今のところ使う予定はないが、急に展示が決まることだってあるし、その時に使うためのもの。

そのままダラダラと時間は過ぎ、ようやくテスト終了。

「快斗ー、どうだった？　……って聞くまでもないか」

「ケケッ。よく分かってんじゃん♪　んなことより、新聞返せよ」

「ハイハイ。ったくもー、オヤジなんだから快斗は」

「大人だって言えよ」

朝、新聞を読む間もない時間に起きたから、学校に行ってから読

もうと持ってきたのに、来る途中で青子に奪われた。

いわく、

「テスト終わるまでダメ！　ムカつくから」

だそうだ。

何なんだよ、『ムカつく』って……。

ま、とにかく返してもらった今朝の新聞を広げる。

キッドの記事は仕事をしていないから載っていないが、これはまぁ日課のようなもんだ。

読み進めていくうちに、青子の言っていた『ムカつく』の正体を知った。

その瞬間、

「何じゃこりゃー！！」

と絶叫したのは、ご愛嬌だ。

「うるっさいわね、快斗！　もう少し静かにしてよ！」

「……」

コレ……オレへの宣戦布告ってことか？　青子が不機嫌になるのもムリはない。こんなのが新聞に載ったら、警部はすっ飛んでくだろーしな。
ニヤリと口元が上がるのも仕方ない。こんな正々堂々と出されて、乗らないオレなわけがない！

鈴木次郎吉……鈴木って、あのお嬢さんのとこか。なるほどなるほど。ふーん？　ってことは、あの名探偵にも、ご登場願えると思っていいのかな？
退屈してたしちょうどいいや。せっかくご招待いただいたのだから、きちんと参りましょうか。

携帯を取り出し、入手していた次郎吉さんの携帯へとメールを入れる。もちろん、オレの身元は分からないようになっているのだが。

――――あ、入手経路は秘密ってことでヨロシク♪

しっかし……すげぇよな。見開き使うって。
デカデカと載った『怪盗キッドに告ぐ！』の文字。

その下に、

『貴殿が所望するビッグジュエル“大海（ブルー）の奇跡（ワンダー）”を潮留に在する我が大博物館の屋上に設置した
手中に収めたくば取りに来られたし

鈴木財閥相談役　鈴木次郎吉』

という、オレを見事に煽ってくれた挑戦文。

別に所望はしてねーけど、ビッグジュエルってことだし。
とりあえず、下見はこのテストが終わった今週末の土曜日ってことで。寺井ちゃんとも相談しねーとな！

「んじゃ青子！　オレ帰るわ」
「うん！　明日寝坊しないこと！」
「うっせー」

青子は残って恵子と勉強するらしい。熱心なこった。

『貴方の提案快く承ります
決行は１０月１２日２０時、その前夜に下見する無礼をお許し下さい

怪盗キッド

Ｐ．Ｓ．Ｂｌｕｅ　ｗｏｎｄｅｒの名の如く、歩いて取りに参上しよう』

## 空中歩行１（後書き）

みなさま、こんにちは！　ペロコです。
４月も３分の１が過ぎたのに、肌寒い日が続いていますが、体調のほうは大丈夫でしょうか？

いよいよ本格的にスタートすることが出来たこの「キッドｓｉｄｅ２」です。
『空中歩行』からスタートいたしましたぁ！　まずは、そこにいたるまでのプロローグ的なものから。

１０月っていったら秋。中間テストの時期だよな～というところから、考え始めました。青子ちゃんは、この「キッドｓｉｄｅ」の中ではあまり出てこないので、こういう普段の快斗の場面でしか出せない貴重な存在なので、しっかりと楽しみながら書かせていただきました。

さて、次からは一気に下見の場面へと飛びます。最初に忠告したとおり、ネタバレしまくりです。そりゃもう、初めてこの「空中歩行」のお話を知るという方は、読まない方がアニメを見て（もしくはマンガを読んで）楽しめるんじゃないかと思うぐらいにネタバレしています。ご注意を！

今のところ１週間ごとに更新するのが目標です。授業も始まりだしましたので、どうなるのか未だに分かりませんが……。
今後ともよろしくお願いします！

## 空中歩行２（前書き）

何度も言うようで、くどいかもしれませんが、ネタバレしまくりです。

ご注意下さい。

## 空中歩行2

寺井ちゃんとの今回の作戦会議も終わり、下見をする土曜日がやって来た。
今回は、この下見がいつも以上に重要な意味を持つものだから、普段より気合いが入る。だって、下見をお披露目するんだから。

事前の下調べで、次郎吉さんが自伝映画を録るために、オレが下見すると予告した今日、多くのヘリを飛ばすことを予定していることを知った。
となりゃ、これは使わなきゃいけねぇだろ！

もちろん、園子嬢が、毛利探偵を招待しているのもリサーチ済み。つまりは、予測通り名探偵くんにもご登場していただけるということらしい。

今回寺井ちゃんには、自伝映画の撮影スタッフの人と入れ替わってもらい、ヘリの操縦に入ってもらってしっかりタッグを組んで仕事に臨む。

寺井ちゃんとオレが乗ったヘリは7番機だ。2つの向かい合うビルの間にオレが浮く（ように見える）というのが、今回の手品。

寺井ちゃんの操縦するヘリでその2つのビルのうち、1つの屋上へと行き、ヘリからワイヤーの先をビルの屋上へと引っ掛ける。そしてそのまま向かいのビルに飛び、そのビルにも再びワイヤーを引

っ掛ける。
とりあえず、舞台装置はこれでＯＫ！

「んじゃ、寺井ちゃん、とりあえず姿見せに行ってくるよ。時間だし。あとは計画通りによろしく」
「ぼっちゃま。本日はあくまで下見でございますが、十分にお気をつけになって、いつ如何なる時も」
「ポーカーフェイスを忘れるな。大丈夫、分かってるって！　そんじゃ！」

心配性の寺井ちゃんにそう言い残して、ヘリから飛び降りる。その時、黒い布をかぶってな。夜に白い姿は、やっぱり目立つからな～。

ちょっと遠くから来た感じを装って、路上を見渡す。ひゃ～。すげぇ人。下見なのにこんなに集まってくれるなんて、オレ感激☆
マジシャンとしては、誇らしく思えるね。この人の多さは。

黒い布を取り払った瞬間、下から湧き上がる歓声。布はとりあえずスーツの中へたたんでしまう。そして、オレは例のビルの上へとひとまず着地！

用意しておいた滑車を背中に取り付けて、ワイヤーへとつなぐ。
そして再び黒い布を頭からかぶり、ビルとビルの間、ちょうど真ん中辺りへと滑車を利用して移動する。

「寺井ちゃん、準備はいいか？」
「はい、いつでも大丈夫でございます」
「よしっ。じゃぁ、ショーの始まりだぜ！」

服に取り付けた無線で寺井ちゃんと連絡を取り、始まりの確認をする。

ＰＯＭ☆

煙幕を立てると同時に、黒い布を取り去り、再びしまう。姿を少しの間消して滑車を取り付けていたため静かになっていた見物客や警察の方々などが、再びざわつき、その表情は驚きでいっぱい！
マジシャン、冥利に尽きるってね。うん、バッチリ！　オレってばやっぱり天才！

下の人を見ていたら、ふと今日の中森警部の気合いの入り方を思い出して、笑みがこぼれた。
オレが「下見をする」と公言したのは初めてのことだったから、警部はそりゃもうすごい気合いの入り方だった。

目立たない位置へと飛ばしたハトに取り付けたカメラの映像に映った警部は凄かった。オレが地上にいると思い込んでいるのか、いつもの恒例行事なのか知らないが、変装を見破るためのチェックをかなり念入りにやっていたようだ。

無線を使って、部下の人へと

「何？　キッドかどうかの見分けがつかない？　引っ張りゃいいんだよ顔を！　どうせヤツは変装してんだからな！　『ギュ』じゃなくって『ギューッ』だぞ！」

と、怒鳴りつけていた。ぜってー痛いぞ、アレは。やられたことないけど。

するとそこへ、次郎吉さんの怒鳴り声が寺井ちゃんも乗っているヘリの無線へと飛び込んできた。

## 空中歩行２（後書き）

みなさま、こんにちは。ペロコです。
映画も本日公開となり、ペロコは明日見に行く予定です。

さて、前回言った通り、ネタバレしまくりの第２話、いかがでしたでしょうか？
とりあえずは、一気に飛んで姿を見せるところまでいってもらいました。飛んだ部分は、後々補足的に追加していくという形になります。

空中歩行を書く上で、最も難しいのは、歩いている時何を思うか。それですね、やっぱり。
みなさま、色々と考えているところがあるかもしれません。あのコミックだったりアニメだったりをご覧になって（もしくは、コレを読むに当たって読み返して）。
どういう風に想像されているのか……。ちょっと気になります（笑）

一応次の話の予告……のようなものをさせてもらうと、そうですね。まだ歩いてます。というか、歩きます。消えるところまではいかないんじゃないかな。
更新は、来週の土曜日となります。お楽しみに☆

では、感想などいただけたら励みになります。
今後もよろしくお願いしますね！

## 空中歩行3

「だまされるな！　これはまやかしじゃ！！　キッドは黒いアドバルーンか何かで上空からワイヤーで体を吊ってるだけに過ぎん！」

ひぇー、でけぇ声。
ここに来るまでに取り付けさせてもらった、次郎吉さんに付いた盗聴器からも声が入ってくるんだから、たまったもんじゃねぇ。
警部並みの声量じゃねぇか……。

「上じゃ！　近くのヘリは彼奴（きやつ）の頭を取って確認せぃ！」

お、狙い通り！　近くのヘリだったら寺井ちゃんの乗ってる7番機だし。

「7番機、了解しました。これより怪盗キッドの頭上へ移動します」

寺井ちゃんの声が無線を通じて届く。頼むぜ、寺井ちゃん……。
盗聴器からは園子嬢のオレを心配するような声と、次郎吉さんの妙に自信に満ちた声が聞こえてきた。

「ちょっとおじ様！　本当にそうなら、ワイヤーがヘリのプロペラにからまって大変なことになっちゃうんじゃない！？」

「フン……彼奴(きやつ)とてそのぐらいの事は予想しておるよ……」

もちろん、してたよ？　だから寺井ちゃんにヘリに乗ってもらってんだから。

「どーせヘリが近づいたらワイヤーを切って、飛ぶ気じゃろう……」

いや、そこが違うんだなぁ……。ワイヤーはヘリに回収してもらうんだからね。

寺井ちゃんの乗ったヘリがオレの頭上へと近づいてきた。ヘリから繋がっている釣り糸をピンと張り、滑車を取り外してワイヤーを回収してもらう。

寺井ちゃんの乗ったヘリは、予定通りオレの頭上へとやって来た。

「こ、こちら7番機！　キッドの頭上には何も……」

「何じゃと！？」

寺井ちゃんの戸惑ったようなフリをした報告に、焦る次郎吉さん。そりゃそうだよな。ヘリに乗ってるのが寺井ちゃん、つまりオレの仲間ってことを知らねぇんだし。

あとは、左右を確認してもらわないとね。きっと来てくれると思うし。今は横から吊られてないってことを知ってもらってからじゃないと、驚きは半減するってね。

しばらく待つと、オレの右側のビルには警部の気配、左側のビルには探偵くんの気配がやって来た。ヘリのプロペラ音で声は聞こえねぇけど、気配は驚いてる……ってことは、ヘリに吊られてるってことは気づいてないね。よしよし。しめしめ。完璧に狙い通り！

さて、確認も終わったところで、そろそろまいりますか。

「オホン……。レディース・アンド・ジェントルメーン！！」

オレの掛け声に見物客が一斉に湧く。

「さぁ、今宵の前夜祭、我が肢体が繰り出す奇跡をとくとご覧あれ……」

見物客に向かってそう宣言した後、寺井ちゃんへと小さい声で連絡を取る。

「いくぜ、寺井ちゃん」
「はい」

そして、ポケットにしのばせたテープレコーダーから、事前に録音しておいた足音を流す。それに合わせてヘリに吊られながら、足を進ませる。

コツ、コツ、コツ……。

潮留に響き渡る、オレの足音。ヘリが進むことによって前進する、オレの体。全ての人間がオレに注目する、この快感。

マジで気持ちいい……。たまんねぇ。だからやめられねぇんだよな、こうやって手品を披露するのって。もう、やみつきだね！

次郎吉さんに取り付けた盗聴器から、色んな人の声が聞こえてきた。

「あ、歩いてる！　空中を……」
「すごい！」
「なるほど……。歩いて盗りに来るとはこういう事か……」

園子嬢と蘭さんはオレの手品に感心してるし、毛利探偵はどこか納得した雰囲気のようだ。

そして、次郎吉さんの困惑したような声が聞こえてきた。

「そんな事より、教えてくれぬか毛利探偵……。天地の定めを蔑(ないがし)ろにするこの絡繰りを……」

## 空中歩行３（後書き）

みなさま、こんにちは。ペロコです。
順調……といえるのかどうか分かりませんが、１週間おきに書けています。

今週というか、今回のお話にて、ようやく歩き始めたということで。
うーん……ちょっとゆっくりすぎますかね？　話の進み具合。どこで切るのか、難しいんですよねー。

これまで、キッドｓｉｄｅとして色んなお話を書いてきましたけど、難しいです。空中歩行って。手品初披露ですからね、コナン作品としての中では。（いや、世紀末のラストでやってるけど・笑）
きちんと書けるように頑張りますっ！

ではでは、感想などいただけたら嬉しいですｖ
これからもよろしくお願いしますね！

## 空中歩行４

次郎吉さんの困った声に対する、毛利探偵の返答は無かった。
ヘリの無線が続いて聞こえてくる。

「こちら3番機！　キッドは現在、潮留公園上空をほ、歩行中……。このままですと、1分足らずで鈴木大博物館屋上に設置された『大海の奇跡（ワンダー）』の元へ……」

そうだね。あと1分足らずだね。そこに行くこと自体は。ただ、気になっていることがあった。
それは、オレが遠くから来たのを装って、姿を見せたときのこと。
次郎吉さんに取り付けておいた盗聴器から気になる会話が飛び込んできた。

「相談役、どうします？　念のため例の仕掛けを作動させて女神像を中へ……」
「えぇい、うろたえるな！　今夜はただの下見。盗られやせん」

例の仕掛け……。どんなものなのかは知らねぇけど、外に取り付けてあるものを中へ入れることが出来るってことなんだろうな。
うん、やっぱり下見をこうして見せておいてよかったよ。堂々と「来い！」って言われてるんだから、何かあるとは思ってたし。
係の人を怒鳴りつけて否定した次郎吉さんは続けて言った。

「それに、彼奴は歩いて来ると予告した。拝見しようじゃないか、月下の奇術師と謳われた大泥棒の出方を……」

自信たっぷりだった次郎吉さんは、まさかオレが『空中を歩いて』来るとは思っていなかったんだろうな。ま、大抵の人は思いつかねぇだろうけどさ。

あの時の係の人が、またしても次郎吉さんに問いかける。

「相談役！　例の仕掛け、作動させた方がよろしいのでは？！」

だが、次郎吉さんの返事はない。そして、もう一度。

「相談役！！」

しばらくして、

「止むを得んな……」

という、諦めた次郎吉さんの声が聞こえた。

そして、ガコッという音がして、目の前に迫りつつあった女神像が回転して、またしても女神像が外へ出てきた。なるほどね～。こうやって本物を中に入れてしまうことにしてたんだ。

ケケケ。思わず笑みがこぼれた。

その時、彼の気配に突然気づかされた。観客の中でかがみこんで、例の博士の発明品だという殺人キックを繰り出すためのクツを触っているメガネをかけた少年。

名探偵、そっからボール蹴る気か？　ま、蹴られたら吊るされてるオレには逃げることが出来ないんで、ここは撤退するのみ！

「さて、前夜祭はここまで……。明晩２０時、再び同じ場所でお会いしましょう」

宣言して、煙幕を張ると同時に、再び黒い布をかぶって体を覆う。そして、

「寺井ちゃん、頼む」

とだけ言って、吊るしてあるオレの体を引き上げて、ヘリの中へと入れてもらう。そして、かぶっていた黒い布をバサリと外し、ふぅと一息つく。

「坊ちゃま、お疲れ様でした」

「寺井ちゃん、やっぱり次郎吉さんもそれなりに考えてたみたいだよ」

「そのようでございますね。回転し始めた時は、思わず感心してしまいました」

「だよね～」

さすが鈴木財閥。自伝映画の話を知ったときも驚いたけど、あの装置結構、金かかってるよな。……それに、もう1つニセモノも作ってたみてーだし。

まぁ、とりあえず次郎吉さんが考えてたことはハッキリ分かったし、本番はあくまでも明日。

「寺井ちゃん、明日も頼むぜ」
「はい。ですが、決して無理はなさらないで下さい」
「はいはい、分かってるって！」

ったく、寺井ちゃんも心配性だよなぁ……。

## 空中歩行４（後書き）

みなさま、こんにちは。ペロコです。
何とか１週間で更新できました……。最近、全く時間が取れなくて危なくなってきています；

さて今回は、とりあえず下見編終了ということで。
ネタバレしまくりで進んでいる「空中歩行」なんですが、この次の日。本番前は完全にオリジナルになると思います。（だって原作に載ってないし）
なので、思い浮かべばいいんですが難しい可能性もあるし、時間もかなり限られてきているので、更新自体が危うくなっています。

もし遅れた場合は申し訳ないです。出来るだけ１週間という期限は守りたいと思っておりますっ！

ではでは、感想・激励（笑）・ダメだしなど大歓迎ですので、これからもよろしくお願いしますね！

## 空中歩行5

次の日、あっちこっち大騒ぎだった。

オレが潮留の上空を『歩いた』のは、誰にとっても驚きだったようで、テレビ・新聞は盛り上がっていた。まさか、怪盗キッドが地上を普通に『歩いて』くるとでも思っていたんだろうか……？　んなことありえねーのに。

今日、日売テレビはオレの現場を中継するらしい。コレは断然気合い入るね！

今朝の新聞は、駅の売店で各社1部ずつ買い占めた。『驚異！キッドが空中を歩行！？』とか、『堂々たる空中パフォーマンス！』とか見出しがたくさん出ている。

いやぁ……何か照れるな〜。

「ぼっちゃま、顔の筋肉が緩みきっていますよ」

「しゃーねぇだろ？　嬉しいんだからさ」

今、オレは寺井ちゃんの店で最終打ち合わせの真っ最中。本番は今日だからなー。

「あ、寺井ちゃん。昨日の晩、ちゃんとやっといてくれた？」

「ばっちりでございます」

昨日、あの下見の後夜遅くに、もう一度しのびこんでもらった。ヘリの番号に細工してもらうためだ。

「さすが寺井ちゃん。助かるぜ。オレは今日は完全に別行動だからさ。まぁ、無線で連絡は取るけどな」
「私としましては、心配なのですが……」
「だーいじょうぶだって！　警部と次郎吉さんのことなら考えることは大抵読めるし」

ただ、ある意味読めない毛利探偵と、予想外の行動とカンが鋭くて読めない探偵くんがいるけどね。オレとしては楽しいからＯＫなんだけどさ。

よく言えば素直、悪く言えば単純な次郎吉さんや警部は、からかうのが楽しくてたまらない。

予告時間の２０時まであと7時間。

「んじゃ、そろそろ準備行ってくるわ。あとはよろしくな」
「かしこまりました。お気をつけて」

そう言う寺井ちゃんにヒラヒラと右手を振り、店を出て次郎吉さんの元へと向かう。大量に入れるであろう警備員の１人にでも変装して紛れ込めば、誰も気づかねぇし。

しばらく歩いて、鈴木大博物館へと到着～♪次郎吉さんは……っと。あ、いたいた。

「取締役！　こちらに来てください！　怪しいものを発見いたしました。おそらく昨日キッドが残したトリックのタネだと思うのですが、大きすぎて持ってこれないのです」

「何ッ！？」

あははー。やっぱり警部とタイプは同じだな。扱いやす～。

博物館の裏手の物置へと誘い込む。

「どこじゃ？　キッドのタネとやらは？！」

「そんなものありませんよ。私を誰だと思っているのですか？」

オレ本来の声へと戻し否定したら、

「何ッ！！」

と言って振り返った。

「貴様！」

「おやすみなさい」

プシューッ。

「おま……怪と……」

ビックリしたー。名前呼ばれたかと思ったよ。まぁありえねーけ

どな。あとは、あの犬だな。確か、ルパンって名前だっけ。問題は、どうやって寝かせるか、だけど……。やっぱり催眠スプレーの方がいいよな。エサに何か混ぜるのは避けたいし。

さーて、どこにいるかなぁ？　次郎吉さんを物置に閉じ込めて、ルパン探しへ。

さすがに建物の中にはいねぇだろうから、周りを見てまわる。

結局、次郎吉さんのハーレーにおとなしく乗っていた。吠えられる前にマスクをつけ、スプレーをそっちに向けて放出する。犬だから匂いには弱いはず……と思っていたら、やっぱりそうだ。

近寄っても吠えねぇってことは寝てるよな。まぁこれはこのままにしておくか。動かしたら起きそうだし。

さてと、次郎吉さんに変装してっと。結構ごっつい人だな、次郎吉さんって。

それでは、もう一仕事といきますか。

## 空中歩行5（後書き）

こんにちは！　ペロコです。

よかった～。何とか1週間で更新できました。完全オリジナルの部分。かなり危なかったんですけどね；
間で、記念日小説のこととか考えてたら怪しくなってしまって……。
これだけはやっておきたかったですから♪

さて、空中歩行も5話目へと入りました。1つの話が全部で何話になるかは未定なんですが、順調といえますかね。
このオリジナル部分、まだ少し続きます。とりあえず、次郎吉さんとかルパンとかを眠らせるという段階を5話目にてやらせていただきました。
『もう一仕事』ありますから、6話目もオリジナルが入ることになります。

ではでは、来週無事に更新できることを祈って……。
感想などお待ちしています！　これからもよろしくお願いしますね。

## 空中歩行6

次郎吉さんの姿で博物館の中へ入ると、たくさんの人が駆け寄ってきた。

「取締役！　どちらにいらっしゃったんですか？」

「おられないから心配してたんですよ！」

おーおー。けっこう人望厚いな、次郎吉さんって。

「見回りじゃ。自分の目でもしっかり見ておかんとな」

と、とりあえずごまかしておく。

「というわけじゃ。わしは、これからビラを配ってくる」

「ビラ……ですか？」

「そうじゃ。キッドファン大歓迎というな」

「し、しかし……」

「より迫力のあるやつを撮りたいし、そうやって集まった彼奴のファンの前で捕り物劇を見せてやるのじゃ！　アーアッアッア！！」

「……」

あれ？　引いてる？

「では行って来る。彼奴の予告時間までには戻ってくるから心配するでないぞ」

「はぁ……」

何だか呆気に取られたような人を背に、博物館を出て、さっきの

ハーレーのところへ戻る。ルパンはまだ眠っているので、このまま上から布をかけて乗せていくことにした。

「さて、たくさん来てもらうためにも、あっちこっち行かないとね。では行きますか」

少しだけ呟いて、ハーレーのエンジンをかけ、まずは潮留を中心に配ることにした。

駅前でビラを配って、1人でも多くの人に呼びかける。

「今夜は、キッドの予告日！　キッドファン大歓迎じゃ！　どんどん来るがいいぞ！」

子供や、若い女性が集まってきた。

「これ、くれるの？」

「あぁ。持って行くがよい。友達も誘ってやるとよいわ」

「うん！　ありがとー、おじいちゃん！」

おじーちゃん……。変装してるし、話し方もそうしてるからしょうがないとはいえ、何かショックだな。オレ、まだ17だぜ？

50枚ほど配って、次の地点へと移動開始。米花町へ向かう。

探偵くんの地元、米花町。あの時の子供たちは……家で中継見て

るかな。でも、それはそれで嬉しいね。どんな形であれ、オレのショーを見てくれてるってことだし。

「キッドファン大歓迎！　キッドの生のショーが見たいという人は、今日潮留に来るとよいぞ！」

「あら、珍しいわね。怪盗さんのショーにご招待って。警部さんが許してくれてるのかしら？」

「え？」

いつの間にか、背後に女の子が立っていた。それは、あのエッグの時、名探偵の家で出会った彼女……。

「警察の言うことは、ワシがだまらせるが？　お嬢さんも来るか？」

「遠慮しておくわ」

かがんで、視線を合わせて聞いたが、返事は素っ気なかった。

「どこかの探偵さんみたいに、それほど怪盗さんに入れ込んでないしね」

「そ、そうか……」

さっきの『おじいちゃん』もショックだったけど、これは別の意味でショックだな。

「それじゃぁ、気をつけて頑張ってね。彼、かなり気合い入ってたから、気を抜くと危ないわよ、怪盗さん」

「は？」

怪盗さんって、……『怪盗さん』！？

「あ、ちょっ……」

行っちゃった。な、何だったんだ……。

しばらくボー然として突っ立っていた。

やっぱり紅子に似てるなぁ、彼女。何を考えているのか分からない表情とか、実はオレの正体を分かってるところとか、鋭いところとか、ミステリアスなところとか……。

挙げれば挙げるほど、紅子の小さいバージョンにしか見えなくなってきた。

「でもまぁ……」

と、口元に笑みが浮かぶ。

こちらとしても、気合いを入れてやらないとね。せっかくご忠告してくれたわけだし？

もう少し、あっちこっち回って、お客さん集めてから帰ろうかな。まだ足りないよなー。

さて！　気合いを入れて回るとしますか！

## 空中歩行６（後書き）

こんにちは、ペロコです。
本当、ギリギリです。毎回。１週間というお約束を守るのが精一杯です。

さて、今回は完全にオリジナル要素満点☆
前回の『キッドｓｉｄｅ』で「世紀末の魔術師」をやった際、好評だった（？）哀ちゃんに出演していただきました♪
完全に遊んでいます。これで大丈夫なのかっていうぐらいに、オリジナルの部分は遊んでいます。もう、いいですよね？

サラリと正体を見破っている哀ちゃんが書きたかったんですよね～。
江古田に行って、紅子さんにご登場していただくことも考えたんですが、予言めいたことを言うだろうと考えて、断念。難しいんですよ。暗号とか、予言とか。
ということで、哀ちゃんの友情？　出演で！

さて、次回からは、原作の内容に戻ろうと思います。いよいよ、本番当日の夜。怪盗さんの動きは、次郎吉さんの動きでもあります。丁寧に書いていけたらと思っておりますので、次のお話も楽しみにしててくださると嬉しいです！

そして、感想などいただけたらなお嬉しいです☆
これからもよろしくお願いしますね。

## 空中歩行7

それから2，3ヶ所回って、博物館へと戻ってきたら、すごい人ごみだった。あ、テレビも来てる。おぉ。いっぱい寄ってきた。

「『大海の奇跡（ブルー・ワンダー）』の所有者（オーナー）の鈴木財閥相談役、鈴木次郎吉さんですね！」

「いかにも」

違うけど。

「予告の時間まであと1時間ですが、キッド対策は万全なんでしょうか？！」

さぁね。警部がどうしてるか……。

「フン！　昨夜（ゆうべ）はチンケなマジックショーがあったようじゃが、今夜は儂（わし）が皆さんにお観せしよう……。ハリウッド映画顔負けの大捕り物劇をな！」

まぁ、実際に見せるのはそれに失敗する次郎吉さんなんだけどね。

「で、では自信がおありで……」

「なんなら、警察に引き渡す前にあんたんトコのＴＶに出演させてやってもよいぞ！　彼奴の泣きっ面の全国放送じゃ！」

泣くのは次郎吉さんだけどね。頼むぜ、寺井ちゃん……。

「では、一旦ＣＭです！　……はい、ありがとうございました」
「うむ」

頷いて、博物館の敷地内に停めてあったワゴン車へと入る。もちろん、ハーレーは専用の駐車場に置いてきた。寺井ちゃんは、昨日と同じで、７番機へと入ってもらっている。

「相談役、お疲れ様です」
「うむ。様子はどうじゃ？」
「はい。やはり、チラシと中継が入る影響なのか、すごい野次馬の数で、警部さんが怒ってらっしゃいました。何でも、数が多すぎて変装かどうかを調べられないらしくて……」
「それで？」
「ノーチェックだそうです。まぁ、キッドは空中から来ることですし、大丈夫だと思われます」

まさか、今ここにいるとは思っていないらしいね。うんうん、予想通り！

「そうじゃな。ヘリからの映像はどうじゃ？」
「特に異常はありません」
「よし、気を引き締めていくんじゃ」
「はい！」

上々だね。準備万端、計画通り。７番機からの映像もちゃんと入ってるみたいだし。表情には出さないが、オレは内心満面の笑みだった。

すると、突然探偵くんが駆け込んできた。多少ビックリはしたが、あのお嬢さんにご忠告もいただいてたし、別にここに来てもおかしくない。
けど、その理由には驚いた。

「なに！？　昨日の怪盗キッドの映像を見せてくれじゃと？」

何でまた突然……。

「うん！　どーしても見て来いって小五郎のおじさんが……」

んなバカな。あの人がそんなこと頼むわけねーっての。もしかして、毎回こうやって色んな資料見てんのか？

「ボウヤ、昨夜穴が開くほど見たじゃないか」
「それに、もう相談役の自伝映画の製作スタッフの元へ送っちゃったよ……」
「え〜〜〜！」

あはは、探偵くんが『子供』になってるよ。

でも、嬉しいな！　そんなに何回も見てくれたなんてさ。それでも気づかなかったってことだよね。
すると、中森警部が入ってきた。

「まぁ、その映像は全て、後ほど我々警察へ提出してもらいことになりますよ。なにしろ、怪盗キッドがあんな派手な下見をやるなんて、今までになかったことですからな……」

まぁねー。あの下見のおかげで、こうして今目の前に立ってられるわけだし。いつもの警部だったら、昨日みたいにきっと鼻つまむだろうし。あれ、痛いんだろうなー。やだなー。

思わず顔をしかめそうになっていると、備え付けてあるＴＶでカウントダウンが始まった。予告時間１分前だ。

寺井ちゃんとは連絡取ってないけど、計画はしっかり立ててきてるし、大丈夫。

頼んだぜ、寺井ちゃん！

## 空中歩行7（後書き）

みなさま、こんにちは。ペロコです。
とうとう、7話目まで来た（のにほとんど進んでいない）「空中歩行」です。
オリジナルを混ぜつつ、時間に追われつつなので何だかのんびりと展開が進んでいるような気がしないでもないです。
みなさまは、どう思いますか？

今回のお話では、とりあえず登場する直前まで、ということにしました。いよいよ、次話からキッド（作り物）が登場することになります。寺井ちゃんの活躍によって（笑）
インタビューでの心の中の突っ込みは……こんなこと思ってたら面白いな～程度のものです。

次のお話を来週にきちんと投稿できるように、今から頑張ります！
　本当ギリギリなんですよ；
感想などなど、お待ちしています。お気軽にどうぞ～♪
これからもよろしくお願いしますね！

## 空中歩行８

テレビの中でのカウントダウンは、残り３０秒を切った。

「フン！　来やせんよ」

オレは、ここにいるしね。

「ショーを始める前からステージに客を上げ、自分の周りを囲ませるマジシャンなんぞまずはおらぬ。トリックのタネがバレてしまうからなぁ」

マジシャンとしては出来るだけ避けたい状況にあることは違いない。

「彼奴は今夜もあのビルの間に姿を現すと言い放った！　野次馬の視線が集まり、ヘリの風に煽られ、ハンググライダーで飛ぶこともままならぬあの空中にな！」

カウントダウンは１０秒前になっている。寺井ちゃんが今頃準備に入ってるところだな。

「ありえんよ。あそこに姿を現すなんぞ……。まぁ彼奴が天狗や仙人の類なら話は別じゃがのぉ……」

天狗でもなく、仙人でもない。マジシャンだぜ、オレは！

「アッアッアッ……」

ＰＯＭ☆

「アッ！？」

時間通り、バッチリだぜ、寺井ちゃん！

「か、怪盗キッド！」

んー、我ながらいい出来じゃん！　さっきオレにインタビューしたアナウンサーが興奮しながら

「キッドです！　たった今、怪盗キッドが予告通り姿を現しました！」

と、当たり前のことを叫んでいる。オレは約束を破ったりしないってのに。

「バ、バカな！？　一体ヤツはどこからどーやって姿を！？」

まぁねー。突然だし、警部が驚くのも無理はねぇか。

その時だった。雨が降ってきやがったーーー！！

寺井ちゃん、ヤバイぜ。

テレビでは、さっきのアナウンサーがまだ叫んでる。

「と、突然の雨にもかかわらず、キッドコールは鳴り止みません！」

それは嬉しいんだけど。

すると、今度は背後で

「おい！　どーした7番機！？　おい！」

と、係の人が叫んだ。7番機？

「何じゃ！？」

「急に7番機からの映像が途絶えまして……」

寺井ちゃんか。

「こちら、7番機。特に異常はありませんが……。おそらく、この雨の影響で、一時的に映像が乱れているのでは……」

ナイス、寺井ちゃん！

と、そこへ警部が意外に鋭く切り込んだ。

「いや、もしかしたらキッドが手下に妨害電波を流させて何か企んでいるかも……」

近いけど遠いな、警部。けど、これに探偵くんが口をはさんだ。

「キッドに手下なんているの？」

というか、いるのはもうＯＫなのかな。

「あぁ……。老人とか若い女とか色々報告はあるが、ひとりいることは確かだよ」

へぇー。老人……は、寺井ちゃんってことかな。ヤベェな、当たってんじゃん。いや、それより、若い女って誰のことだ？こっちは間違った情報ってことかな。

「おい！　周辺を警戒中の各員聞こえるか！？　中森だ！」

警部が無線に向かって叫んだ。

「野次馬の中に電波を出すような機械を持った奴がいないか、今すぐチェックしろ！　そいつがキッドの手下かもしれんぞ！」

いや、いねぇって。ヘリに乗ってんだからさ。

「あ、歩いています！　キッドが昨夜（ゆうべ）と同じく歩き始めました！」

と、やはりアナウンサーがテレビカメラに向かって叫んでいる。

「相談役！　早く指示を！　このままでは今度こそ本当に……」

焦る係員が指示をあおぐ。

「フン！　そう易々と盗られてたまるか。『大海（ブルー）の奇跡（ワンダー）』を一たん館内に取り込め！　彼奴との知恵比べじゃ！」

と、とりあえずは次郎吉さんとして指示しておいた。

## 空中歩行8（後書き）

みなさま、こんにちは！　ペロコです。
8話目に入って、まだこんなところを書いている超遅いスピードの執筆です。

とりあえず、寺井ちゃんによって姿を現したキッド（の人形）。
中森警部の「手下」発言で、うちなりに考えている『若い女』のことなんですが……。
紅子さんだったら面白いなーと思うんですが、いかがでしょうか？
実際には、手下でも助手でもないんですが、一緒にいることが多かったのは事実ですし、キッド本人にとってはそのつもりはなくても、そう見えても仕方ないというか。

みなさまは、どうでしょうか？　よかったらご意見聞かせてください！
そして、執筆スピード遅い！　という方は、遠慮なくどうぞ。ちんたら書きすぎなのかもしれないなーと思っているので、そういう意見の方がいらっしゃるのであれば、スピードを上げて書いていこうと思っています。
ちなみに、スピードというのは、更新スピードではなく1話ごとに入っている内容のことですよ？
1週間おきの更新は、まだ変えられそうにないので、そこだけはご了承ください。

感想のところでも、直接メッセでもかまいませんので、ご意見お待ちしています。
これからもよろしくお願いしますね！

## 空中歩行9

寺井ちゃんの乗った7番機のヘリに吊られて動くキッドの人形に向けて、歓声を送っている姿がテレビに映っている。なんか、不思議な感じ。

そして、相変わらずアナウンサーの気合いの入った中継をカメラに向けて続けている。

「な、何度見ても信じられません！　雨の中、怪盗キッドが空中を歩いています！　本当にこのまま、鈴木大博物館屋上に飾り付けられた『大海の奇跡（ブルー・ワンダー）』は彼の手に落ちてしまうのでしょうか！？」

んー、どうだろうね。まぁ、いただくことには変わりないけどね〜。

「相談役！　『大海の奇跡（ブルー・ワンダー）』の館内への取り込み、完了しました！」

よしっ。

「よーし。これより先手を打つ！　すぐに館内の全ての照明を消せい！」

「え？　消すんですか？」

「あぁ……。彼奴が館内の映像を傍受しておる可能性もあるからのお！」

作戦第2段階のスタートだね。けど、この荒技には警部が黙って

いなかった。

「おい、ちょっと……。そんなことをすれば、逆にキッドの思う壺に……」

けど、オレだって負けねぇ。作戦がかかってんだから。

「ならばあるのか？　中森警部。まるで仙人のごとく、空中を闊歩して迫り来るあの大泥棒を阻止する名案が、他に何かあるというのか！？」

あるって言われたら困っただろうけど、警部は何も言わなかった。その代わり、目的を聞いてきた。

「し、しかし、宝石を明かりを消した博物館の中に取り込んで、一体何を？」

そりゃ警部！　決まってんでしょ？

「要は彼奴に盗ませなければよいのじゃよ。『大海（ブルー）の奇跡（ワンダー）』が彼奴の手に届かなければ儂の勝ちじゃ……」

届くから、オレの勝ちになるけどね。

「そこで相談じゃが、ここの指揮を汝に委ねる代わりに、信用の置ける汝の部下を数人貸してくれぬか？」

と、警部に交換条件を持ちかける。

「部下を？」
「受けてやるんじゃよ。昨夜（ゆうべ）儂が寝る間を惜しんで考えた秘策でのお！」
「……大丈夫なんだろうな？」
「もちろんじゃよ！」
「分かった」

そう言うと、無線で何人か呼び出してくれた。

「この人についてってやれ。何か作戦があるんだとよ」
「はい！」

7～8人ぐらいの刑事さんについて、博物館の中へ入る。

そして円になり、今回の作戦を刑事さんたちに教えた。

「よいか。君らには囮になってもらう。向こうにあるケースを持って、正面から堂々と、そして警備をしながら出るんじゃ。その隙に、儂は『大海（ブルー）の奇跡（ワンダー）』を持って、清掃員に扮して裏口から出る。計画はバッチリじゃ！　ホレ、早く行動せんとキッドが来てしまうわ。急げ！　儂は着替えてくるから」

そう言って、従業員の更衣室に向かって走る。急いで着替え、大きな袋を持って『大海（ブルー）の奇跡（ワンダー）』の元へ。

装置から取り外し、袋の中に入れて刑事さんたちのところへ戻る。

すると、警部から連絡が来たのか、1人が無線に向かって話していた。

「完璧です、中森警部！　この作戦なら、さすがのキッドも裏をかかれて……」

そのキッドが立てた計画とは考えないんだよねぇ～。だから、ダメなんだよ。

「しっ！」

一言で刑事さんの報告を封じ、無線を取り上げる。

「彼奴が盗聴してるやもしれんから、おしゃべりはここまで……。なーに、心配せんでよいぞ！　細工は流々じゃ！　後は結果を御覧(ごらう)じろってなぁ！　アッアッアッ！！」

あ、つい口グセが……。ま、バレねぇとは思うけど。

## 空中歩行9（後書き）

みなさま、こんにちは！　ペロコです。
な、何とか9話目。かなり危うい状況になってきていますが、とりあえず更新できてよかったです。

今回のお話も、ちょっとオリジナル要素が入っています。途中で原作やアニメなどでは蘭ちゃんやおっちゃんなどの会話が入るので、そこを埋めるかのように話を入れてみました。
まぁ、こんな感じの会話がなされていたでしょう、と。

あと、気になったのが最後のセリフ。『後は結果を御覧(ごらう)じろ』って、キッドのセリフとしてよく出てくるんですよね。まじ快で。
ということで、そこにも突っ込んで書いてみました。

……と、ここまでは調子よく書けてきているんですが、レポートの提出など色々忙しいので、来週の更新が危ないです。出来るかどうかわからないので、ここで先に謝っておきます。スイマセン！　本当、毎日何かと忙しくて、誰だよ、大学になったら生活に時間が出来るなんて言ったやつ！　と誰でもなく八つ当たりをしています（笑）

何とか更新できるように頑張りますが、もしかしたら、ということもあると思いますので、そこだけはご了承下さい。
また、感想やご意見などなどお待ちしています！　励みになりますので、ぜひ一言を！

そろそろ『メモリアル・デー』の内容も考え始めています。そっち

は必ず更新しますので♪
これからもよろしくお願いしますね。

## 空中歩行１０

中森警部に何も言わせないうちに無線のスイッチを切り、刑事さんに返す。

で、周りを色々警戒していた刑事さんにも集合をかけて、再び円陣を組むように固まってから、オレは口を開き、次の指示を出した。

「よし、これで準備はＯＫじゃ。『大海（ブルー）の奇跡（ワンダー）』はこの袋の中じゃ」

と言って、持っていた袋を軽く持ち上げる。

すると、刑事さんたちの表情がちょっと安心した感じになった。

え、もしかして、これで安全だとか思ってんのかな？　本当、疑うってことを知らないんだなー、中森警部の部下って。素直というか、何というか。扱いやすいんだよ、これだから。刑事としては致命的だろうけどさ。

さて！　そろそろあのニセモノがバレる頃だし、急がねーとな。

「君達は計画通り警備をしながら、そのケースを持って出るんじゃぞ。儂は今から裏口から外へ出るからな。頼んだぞ」

「「はい！！」」

……うん、この辺は素直っていうか、さ。警部の部下だなーって思うよ。まぁいいや。

オレはサンタクロースのように袋を担ぎ上げ、博物館の裏口から出て、外に止めておいた次郎吉さんのハーレーへ袋を放り込む。ルパンはまだ寝てるみたいだ。

よし、とっととトンズラするか～。確認自体は天気のせいで出来ないけど、この宝石の時期からして、パンドラじゃねーし、まぁいいや。早く行かねぇと警部がそろそろこっちを警戒してる頃だし。

外は、まだ雨が少し降っている。騒がしい雰囲気が向こうから伝わってくるってことは、気づいたか、寺井ちゃんが今逃げてるか……それか両方ってとこか。

あとは、オレが逃げればいいんだよね。

そんなことを思いながら、ハーレーに乗り込んでエンジンをかけて、裏門から道路へ出る。警備員さんは、もちろんオレを次郎吉さんだと思ってるから何の心配もない。

細かい雨がちょっと目に入って痛いけど、まぁこれはしょうがねぇし。これぐらいで苦労してたら、雨の中ハンググライダーで飛ぶなんてできっこないからね。

車の間を走りながら、チラッと左側に見える『大海の奇跡（ブルー・ワンダー）』を見る。ケケケ。今頃警部たちは大騒ぎだろうな～。

「フッ……フフフ……ハッハッハッハ！！」
「何がおかしいの？　怪盗キッドさん？」

えっ……この声、この気配……まさか！

バッと左を見ると、ルパンがしていたはずの帽子をかぶった探偵くんが座ってるし！　ルパンじゃなかったってことかよ！　あぁ～～っ！　ちゃっかり『大海の奇跡（ブルー・ワンダー）』も手に持っちゃってるし！！

てゆーか、気づかなかった！　気配消すなんて、ずるいよ。そういや、探偵くん、オレが車から博物館に入ったときはもういなかったよな！？　迂闊だった……。

「な、何をたわけたことを……。儂が笑ったのは、キッドからその宝石を守り通せたからで……」
「バーロ！　オメーが今日、博物館にこのハーレーに乗り付けた時点で見抜いてたよ。今もそうだが、あの時オメーはゴーグルを付けていなかった。コンタクト使用者がゴーグル無しでバイクに乗るのはかなり辛い。風が瞳に当たって、痛くて涙が溢れ、たとえ風除けがついていても、とても乗っていられないらしいからな」

ここに来た時点で気づいてたなら、何で言わなかったのかすげぇ

気になるけど。最後の『らしい』って……。誰に聞いたんだろう？
オレは視力もいいし、コンタクトの人の気持ちなんて知らないよ。
探偵くんも、眼鏡はダテだったはず。

いつの間にか、雨が上がっていた。

## 空中歩行１０（後書き）

こちらの小説を更新するのは何と2週間も空いていたんですねー。
こんにちは、ペロコです。
「メモリアル・デー」執筆のため、こっちの小説が疎かになっていたんですが、とりあえず今週は更新できました。
続きが気になっていた方には申し訳なかったです。スイマセンでした。そして、話自体もあんまり進んでないし……；

とりあえず、怪盗さんには博物館を出て、探偵くんことコナンさんに気づかないでハーレーを走らせていただきました。
実は気づいていたんじゃないか、とも思ったんですが、どうも表情が驚いたように見えるので、すっかり油断し、かつコナンさんは気配を消していたということで、気づかなかったことにしました。

「空中歩行」も終盤に向かっております。あと何話で終わるのかなんて、さっぱり分かっていませんが、今回も最後にはオマケをつけたいな～と思っています。……思っているだけで、実際には書く時間があるのかどうか分かりませんが；
とりあえずは、この「空中歩行」を終わらせなければいけませんよね！　ハイ。

「メモリアル・デー」の七夕編を考えつつなので、かなり危険な状態はまだまだ続きます。しかも、テストが始まる！　これは危ないです。出来る限り書かせていただきますので、最後までお付き合いくださると嬉しいです☆

では、長々と失礼しました。
これからもよろしくお願いしますね！

## 空中歩行１１

雨が止んだ中を探偵くんの解説というか推理ショーを聞きながら走る。

「まぁ、金持ちのくせに、ボディーガードもつけずにこんな派手なバイクで駆け回ってるジイさんだ。どこかで眠らせてスリ替わる機会（チャンス）はいくらでもあったんだろうけど……」

まぁね。あっさり騙されてくれたから替わりやすかったよ。

「ちなみにこのサイドカーに乗ってたルパンって犬は、潮留公園の木陰に連れてったよ。多分まだオメーが嗅がせた睡眠薬のせいで寝てるんじゃねーか？」

あー、やっぱり強いのかな動物には。危険薬物とかは入ってねぇし、大丈夫だと思うけど。

「アッアッアッ！　儂がキッドなわけあるまい！　現に儂はさっきキッドが現れた時にボウズのそばにいたじゃないか。昨夜（ゆうべ）も彼奴が見せた中空を歩くというあの奇跡の瞬間にな！」

そう、探偵くんってばオレの後ろで一緒にモニター見てたっての！

「あんなの奇跡でもなんでもねーよ！　手品の助手がいれば、容易に出来る単純なトリックだ」

その通りなんだけど、探偵くんに言われるとなんかムカつくな。

「鈴木財閥の精鋭部隊っていったって、警察や軍隊じゃない。臨時に雇われた熟練者（プロフェッショナル）の中に手下を紛れ込ませるのは、そう難しくはねぇだろうからな」

うっ……。確かにあっさり入れ替わっちゃったけどさ、寺井ちゃんと。まぁ、その方も眠ってもらってるけど。

「確かに、オメーが昨夜（ゆうべ）ビルの間の空中に突然姿を現し、ヘリが頭上に来ることによって上から何かで吊ってるんじゃないかという疑いを消し、その後ビルの屋上に駆け上がったオレや警察に、ビルの間にワイヤーなんか渡してないことを確認させれば、本当に空中に浮いてるように見えるが、あの頭上のヘリの操縦者がオメーの手下なら奇跡は奇術になる！」

おー、言うねぇ。まぁ、オレは奇術師なんだしね。じっくりと聞かせていただきますか。

「まずオメーは、手下のヘリで例の2つのビルの上空に移動し、ヘリの上からワイヤーの先を片方のビルの屋上に引っ掛け、ヘリからハンググライダーでもう片方のビルに着地し、屋上にワイヤーを引っ掛けて2つのビルにワイヤーを渡した。そして、身体につけた滑車でワイヤーの真ん中に移動し、まとっていた黒いマントを煙幕と共に脱ぎ捨てれば、怪盗キッドの登場だ！」

あらー、どっかで見てたのかな、この正確さ。

「続いてすぐに、手下のヘリを頭上に向かわせ、ヘリから飛び立つ前にヘリと自分とをつないでおいた釣り糸のような細いワイヤーをピンと張るまで巻き上げさせる。その後で身体から滑車を外して、ビルに渡したワイヤーを素早く減りに回収させれば、上からも横か

らも吊られていないことになり、空中浮遊が完成する」

何だか、探偵くんが怖くなってきたなぁ。絶対態度には出さねぇけど。

「後はヘリが前進するのに合わせて、オメーが歩くフリをするだけ。ポケットに忍ばせたテープレコーダーからコツコツコツと足音を出しながら、小さく揺れたら小股で、大きく揺れたら大股で、吊られていることを気付かせないような絶妙なボディーパフォーマンスでな！」

褒めていただけるのは嬉しいけど、マジで怖いわ、探偵くん。

「そしてある程度歩いた後、煙幕と共に白い衣装を脱ぎ捨て、サーチライトをずらしてヘリの中にオメーを引き上げれば、空中で消えたように見えるって寸法だ！」

## 空中歩行１１（後書き）

みなさま、こんにちは！　毎度おなじみペロコです。
１週間ご無沙汰でした。本格的に暑くなってきましたが、夏本番はまだまだ先。気合いを入れてまいりましょう！

さてさて、今回は、ひたすらコナンさんが喋ります。そりゃもう大量に喋ってます。キッドに口を挿ませないほどに喋ってます。
長台詞ご苦労様といった感じなんですが……。

いつもより短く感じるのは気のせいですよ？　別に、宿題とかレポートとかに追われてるから短くしたなんてことはありませんよ？

さてさて！　（↑流した）
明後日は七夕ですね。「メモリアル・デー」は更新する予定ですので、そちらもお楽しみに☆問題は、まだ投稿できる準備が出来ていないということで。
今から必死にやります（笑）レポート提出が迫っているけど、やります。

ということで、キッドｓｉｄｅ２は来週までのお楽しみ。次の次ぐらいであの名台詞が出てくるかなぁ？
ではでは、これからもよろしくお願いしますね！

## 空中歩行１２

自信満々に話す探偵くんの推理は、その自信の通り本当のことだらけで、何だかオレの立場がないんだけど。

「まぁ、今夜のキッドは警察の目を引きつけるただの人形……。こいつも煙幕でヘリに出し入れしたんだろーが、ただ吊ってるだけだから、バレバレだったよ」

そこまでお見通しとは。さすがだな。でも、普通はそんなすぐに気付かないように精巧に作ったんだけどな。探偵くん、演技でも勉強してたのかな？　人形と人間の動きを遠くから見てて分かるって……。

まぁ、バレバレだろうとなんだろうと、一時でもしのげたからね。とりあえず素直すぎる警部の目を誤魔化せたからあれは成功したわけで。

でも、オレにも言い返させてほしいよね～。

「じゃが、ボウズもキッドの側のビルに登ったんじゃろ？　そのときにヘリから吊るされてたのなら、いくら細い糸でも見えると思うが」

横に来てもらうまで待ってたオレもオレだけどね。でも、確認してもらわないと、横からは実際には吊られてないのに誤解されたらイヤだし。

けど、探偵くんはいつもと同じくあっさりと言い放った。

「先入観と風だよ！」

……へぇ～？

「情けねぇ話だぜ。オメーの頭上にヘリが来た時点で上から吊るされてないと思い込んじまった上に、屋上にワイヤーがないことに動揺し、ヘリの風で見えにくかったことも影響して、その糸を発見できなかったんだからな……」

あ、そうだったんだ。じゃぁバッチリ狙い通りだったってわけね。よかった～、安心したよ。探偵くんでも気付かないことってあるんだね。

それとも……それすら冷静に判断できないぐらいに焦ってたってことかな？　だとしたら、オレとしては嬉しい話だよね！

なーんて、内心で盛り上がってたのに、例のごとく探偵くんはオレの心境など知らず（まぁ、当たり前だけど）全てを否定してくれやがった。

「だが、その爪痕は2つのビルの屋上に残ってたよ。ヘリにワイヤーを回収した時に、先に付けてたフックが引っかかった傷がな……」

あっちゃー。そりゃバレるか。やっぱり、ヘリから回収ってちょっと大胆だったかなぁ。

「しかしのぉ……ボウズは昨夜（ゆうべ）のキッドの映像を何度も観たんじゃろ？」

「解像度にもよるけど、釣り糸ぐらい細けりゃ近くで肉眼で見なきゃ大概のモニターじゃ、ほとんど見えねぇよ……」

ま、そりゃそうだね。

「唯一映ってるとしたら、糸が手前に来るキッドの俯瞰（ふかん）の映像だが、それが撮れるのは、手下が乗ってる7番機。あの映像が、前に博物館の特番で使われていた空撮に、キッドを合成した物を7番機からの映像として流していたんなら、糸が映ってるわけがねぇ」

あ、だからまた映像を見せてって頼みに来たのか……。

「だから雨が降ってきたとき、オメーの手下は映像を流すのを止めたんだろ？　あの特番の空撮には、傘を差す人たちは映ってねぇからな！」

その通り、だね。

「そう……昨夜（ゆうべ）の派手なデモンストレーションも、空から来ると見せかけ、地上の検問を緩めて、鈴木次郎吉に変装してノーチェックで来るための伏線だったんだろーが、迂闊だったな。ゴーグルを付けずにハーレーで乗り付けるオメーがＴＶ画面にバッチリ映ってたぜ？」

そろそろ潮時、かな？

「いやいや、ゴーグルを付け忘れたのではなく、付けられなかったんじゃよ……」

そう言いつつ、ゴーグルを付け、

「変装が崩れちまうからな！」

と一気に次郎吉さんの顔を外した。

## 空中歩行１２（後書き）

こんにちは！　ペロコです。
レポートに追われつつも、こうやって更新しているペロコは、かなり多忙です（笑）本当に忙しいです。今も追われてます（笑）

さて、いよいよクライマックス的な流れになってきた空中歩行のお話ですね。１２話目になります。長いな。
ようやく、怪盗さんは次郎吉さんの仮面を外しました。ここまで来ました。全部で１４話か１５話になると思います。終わりも見えてきた感じですね～。

コナンさんが話す間って、怪盗さんはほとんど何も喋らないんですよ。なので、無理矢理心境を書いているわけなんですが。改めて難しいですっ！　もう今更な話ですが。

さてさて、１３話目は来週更新……できるかな；　頑張ってするつもりではありますが、出来なかったらごめんなさいです。クライマックスなんですし、１週間に１回は更新したいんですが。（今週もギリギリでした；）

ではでは、スローペースではありますがこれからもよろしくお願いしますね！

## 空中歩行１３

次郎吉さんの変装は外したけど、ヘルメットもゴーグルもちゃんと付けてるから、もちろん素顔はバレないだろうけど、ちょっと危険かもしんないなぁ、この距離。こんなに近いの、初めてだし。

けど、探偵くんはそんなこと全く考えてないのか、いつもの麻酔銃を構えながら、さっきまでと同じ調子でオレに聞いてきた。

「いいのか？　７番機に乗った手下……。今頃警察のヘリに囲まれてるかもしれねーぜ？」

そんなことあるわけないと思いながら聞く探偵くんは、結構イジワルだと思う。

「大丈夫。警察のヤツら、パニクってるだろーから……」

まさか気付かないほど警部もニブくないだろうしね。

「大量に貼られた７番のステッカーに惑わされてな！」

「大量に？」

と、一瞬考えた探偵くんはすぐに納得したようだ。この辺の飲み込みの早さは、やっぱり名探偵だよね。

「なるほど……。さては７番ステッカーの上に、もう１枚本当の番号のステッカーを貼ってたな……。飛び立つと風ではがれるように軽く糊付けして」

飲み込みが早いと話が合うからオレは楽しいんだぜ、名探偵？

「あぁ……。おかげでヘリの操縦者（パイロット）は誰も気付かずに乗り込んでくれたよ。後でオレの仲間のヘリとして追い回されるとも知らずにな！　そして混乱に乗じて仲間はトンズラ……」

さりげなく『仲間』って言ってんの、気付いてんのかなー。寺井ちゃんを手下なんて思ったこと、これっぽっちもないからね。

「まさにブルー・ワンダー！　大空の奇跡の脱出ってわけだ！」

大成功したあの時の高揚感を思い出しながら言ってたら、思わず顔がニヤけた。けど、探偵くんは気にも留めず、自分の気になった違いを徹底的に追及してくる。

「大空？　ブルー・ワンダーのブルーは大海のブルーだぜ？」

分かってるよ、んなこと。誰に聞いてんだ？　そういうことじゃないんだって。

「同じじゃねーか！　海のブルーは空のブルーが映ってんだろ？探偵や怪盗と一緒さ……。天と地に別れてるようで、元を正せば人がしまいこんでる何かを好奇心という鍵を使ってこじ開ける無礼者同士……」

人には知られたくないことも秘密にしておきたいこともある。それを、自分のため、人のために、心の中を覗いていくことは探偵も怪盗も同じ。

なーんて、ロマンを語ったっていうのに！　探偵くんは至極真面目に返してきた。

「バーロ……。空と海の色が青いのは、色の散乱と反射……。全く性質が異なる理由によるものだ。一緒にするなよ！　その証拠に水たまりは青くねーだろうが！」

あれ？　これはもしかして、オレのにちょっと掛けてくれてる？　一緒にするなっていうのは、別に言葉だけの話だと出てくる流れじゃないし。

でも……

「お前、夢ねーな」

思わず呆れてしまった。

「夢ばっか語ってちゃ、真実は見抜けないんでね」

そういう問題じゃねぇだろ。って言ってもムダかもしんねぇけど。

「それより、本当にその麻酔銃でオレを捕まえる気か？　このスピードでオレが寝ちまったら大クラッシュだぜ？」

と、ずっと気になっていたことを聞いた。

「大丈夫。このバイクが止まるまで撃たねーし、オメーの身柄はオレの連絡でこっちへ向かってる中森警部が……」

いつの間に連絡してたのかすごく気になったけど。

「フン！　誰が止めるか！」

オレは確保不能の大怪盗なんだぜ？

「それに次郎吉のじいさんが自慢してたろ？」

「ん？」

「このハーレーにはスピードアップの細工が施してあるってな！」

と宣言して、サイドカーを外す。その瞬間、ぐるぐると回る回る。

麻酔銃の射程距離から離れたところでブレーキをかけて、探偵くんを振り返る。

「じゃぁな、名探偵！　その宝石は預けたぜ！　結局、目当ての宝石じゃなかったし、今回は売られた喧嘩を買っただけだからよ！」

と、いつものように言って去ろうと思った、瞬間。

探偵くんは身体を傾けてサイドカーを地面にこすりつけ……ってえぇ！？　火？！　あ！　あの『止まるまで……』って、タンクに穴開けておいて、燃料切れを待ってたってことか！

げっ！　火、火が迫る！

「うわぁぁぁ！！」

思わずバイクを乗り捨て、河原を転がり落ちた。もちろん、それと同時に持っていたダミーのキッド型風船を飛ばすことも忘れずに。

背後でハーレーが爆発する音が聞こえて、さらにはパトカーのサ

イレンの音まで。連絡してるって本当だったんだ……。

そんなことを思いつつ、騒がしい雰囲気がなくなるまでじっとしているしかなかった。

## 空中歩行１３（後書き）

こんにちはです！　ペロコです。
やっとこさココまで来ました。だらだらと進んでいるので、やきもきさせられた方もいるんじゃないかと不安でございます。

一応、原作の部分はココまでということになっていました。ので、キリのいいところまでと思っていたら、いつもよりちょっと長めに（笑）

さて。ここで終わったらわざわざ「キッドｓｉｄｅ」としてやっている意味がない！　という妙な決意というか決心のために、まだ続きます。その後のお話。ちゃんと書きますよ、オマケ☆

で・す・が！　ここで悲しいお知らせがあります。
テストです。月曜日から（爆）なので、来週の更新はきっと出来ないと思います。本当に申し訳ないんですが。こればっかりはどうしようもなく。

次の更新は、８月頭の土曜日（スイマセン、日付が……；）になります。もちろん、更新はオマケ部分。お楽しみに☆（まだ考えてないけど）（爆）
その後書きにて、次に始まる連載部分についても触れたいと思っているので、そちらもお楽しみに☆（こっちは決まっているんです）

ではでは、これからもよろしくお願いしますね！

## 空中歩行１４

「ぼっちゃま！　大丈夫ですか！？」

ヘリからオレの『仲間』の寺井ちゃんがこっちに来たのは、警部たちが去ってから１０分後ぐらいだった。

その間は、とにかく隠れてやり過ごすしかなく、探偵くんの相変わらずな捕まえ方の強引さに呆れるばかりだった。

「ってぇー。寺井ちゃんも無事みたいだな」

「あぁ、盗一さま！　お許しください！　この寺井はまたも、ぼっちゃまを危険な目に……！」

「寺井ちゃん、大丈夫だって！　ただのかすり傷なんだから」

間一髪で何とか探偵くんの強引さから逃げ出せたものの、ありゃかなり危険だった。オレじゃなかったら死んでるぜ？

「ま、オレだからあんな手段だったのかもしんねぇけど」

思わず呟くのは、自惚れではないと信じたい。これぐらい本気でかからないと捕まえられないと思われていると思ってもいいハズだ。

「ダミーの風船をお持ちになっていてよかったです。あれがなければ……」

「ま、済んだことは気にしねぇこった！　こうやってちゃんと逃げ切れたわけだし、早く帰ろうぜ」

座り込んだままそう言い、立ち上がった。

「さ、ぼっちゃま。私の店に。傷の手当てをしなくては」
「いいってこんなの！　ツバつけときゃ治るし」
「いいえ、ダメです。きちんと手当てをしないと、この寺井。盗一さまの墓前に顔向けできません」
「大袈裟だなー、相変わらず。わぁーったよ」

心配性の寺井ちゃんと2人で、寺井ちゃんの店まで治療してもらいに行って、この日の仕事はこれで終了した。

……けど。

手放しで無事終了を喜べる展開にはならなかったのを知ったのは、翌日のことだった。

次の日。何だかんだ言いつつも、やはり緊張していたのか疲れていて、おかげですっかり寝坊してしまった。

「快斗ー？　青子ちゃん来てくれたわよ！？　遅刻するから早く起きなさい！」
「ん～～～」

生返事を返しつつ、いつもと変わらない朝を迎えた。――――はずだった。

朝ごはんを口に入れたまま家を出て、時間がないから学校で読むために新聞をカバンにつっこみ、青子の小言を聞き流しつつ。いつもと変わらない朝。けど、少し違和感を感じる朝。

その正体に気付いたのは、学校に到着してからだった。

教室に入ると、いつものように友達から冷やかしの声と、挨拶がされる。自分の席について、遅刻スレスレだったため先生がすぐに教室に入ってきた。

そんなことを意識の片隅で捉えつつ、持参した新聞に手を伸ばした時に気付いた違和感の正体。

キッドの事件の次の日なのに、青子の機嫌はいつもと変わらない。いやむしろ、いいほうともいえる。天変地異の前触れか？

なんて失礼なことを考えつつ、いつものように第一面に載った自分を見ようとしたオレは、次の瞬間フリーズした。

たっぷり３０秒は固まり、次に叫んだ。

「はぁーーーーーーっ！？」

一斉に振り向かれたが、誰も何も言わない。まぁ何か言われたとしても無視の方向で終わらせるけど。ただ、青子はいつものように突っかかってきた。

「ちょっと快斗！　うるさいでしょ！？　それにまた学校で新聞……」

後半は聞き流したから何て言ってたか知らない。そんな事気にしていられない。頭の片隅で、青子の機嫌が妙によかったのはこれか、なんて考えつつ、目はすごいスピードで記事を追う。

……いわく。

大きな見出しで『キッド大失敗で逃走！』だの『またまたお手柄小学生！』だの、あげくの果てには、『キッドキラー』の称号を与えられた探偵くんが、警部と一緒に写真に載っていて。

オレの立場からしたら、ウソとしか思えない内容ばっかりだし、宝石はオレが返したんだから探偵くんがお手柄なんて言われる筋合いもなくて。ありえない、ありえない。こんなバカな話があるか！？

だいたい、オレは失敗してねぇし、きちんと宝石はいただいたんだぜ？　ただそれを探偵くんに返却しておくように頼んだだけの話で。

それなのにこの書き方……。

探偵くんには確かに、命を狙われてるんじゃないかってぐらい徹底的に追い詰められたと言やぁそうだけど、それを手柄って言われ

てんのは許せねぇ。

だけど、怪盗キッドの正体は絶対秘密。この記事の不当性を言えないこのジレンマ。

本当だったら、オレが一面飾ってたのにーーーーーっ！！

空中を歩いてるオレの超カッコいい写真が載ってたはずなのにっ！！

少し離れた米花町にある大きな屋敷で、オレと同じように怒りを覚えている人がいたらしいとは、風のうわさで聞いた。

## 空中歩行１４（後書き）

お久しぶりです！　ペロコです。
やっと！　やっと空中歩行のオマケを投稿できました。大変お待たせいたしました。って、待ってた人っているのか分かりませんが（笑）

どういった話にするのか、というところから始めないといけないため、なかなか執筆に取り掛かれなかったこととテストが重なったことで時間がかかってしまいました。
とりあえず、これにて空中歩行は終わりになります。終わり方がどうも決まらなくて、紅子さんの登場を願おうかな～とか考えたんですが、出せなかった。
というより、どう出したらいいのか思いつかなかったんですよね。
機会があれば、紅子さんは出したい人です。

さて、お待ちかね（？）の次のお話なんですが……。
実はこの「キッドｓｉｄｅ」を始めてから１番ご要望が多かったのが次にやろうと思っている「銀翼」なんです。
やはりメインだからなのか、すごく「書いてください！」という意見が多くて、でも順番に書くって決めたし……とここまで引き伸ばしていました。

まだ書き始めていないんですが、夏休みに入ったことですし時間もゆっくり取れるかな～と思っています。
書け次第、投稿するつもりですので、こちらもお楽しみに♪

ではでは、感想などなどお待ちしています！

「運命の宝石……。ってご存知かしら？　黒羽くん」
「あ？」

紅子の話は大抵唐突だけど、今日もまたいきなりだった。

昼休み、弁当も食べ終わり昼寝をしようと自分の机の上に腕を組んで、頭を乗せようと思ったその時、冒頭の紅子の言葉が頭の上で発せられた。

「スターサファイアのことよ。宝石の表面に浮かび上がった3本の線が『希望』、『信頼』、『運命』を表していて、交差していることから『運命の宝石』と呼ばれるようになったビッグジュエル。ご存知なのかしらと思っただけよ」

もちろん知っていた。オレの情報網を舐めてもらっちゃ困るね、赤魔女さん？　なーんて、さすがに口に出すわけにはいかないので、そこはスルーして。

「んで？　それがオレと何の関係があるんだよ？」

誤魔化す。というよりは、紅子がそんなことをいきなり言い出した理由を単純に知りたかった。実際、次狙うのはこれかなーなんて軽く考えて計画を立てていたのも事実だったし。
ある程度情報は入手していたから。

……だけど、紅子がオレの質問に答える前に、

「あー、知ってる！　運命の宝石！　舞台やってるんだよね、今。汐留で！」

と、いつものごとく青子が割り込んできた。

「えぇ。中森さんは見に行きたいの？　ジョゼフィーヌ」

「ジョゼフィーヌ？」

おいおい。

「んなことも知らねーのかよ？　ナポレオンの最初の王妃だろ？」

「へぇ～」

「青子、見に行くの？」

恵子まで話に入り込んできた。

「うぅん、行かないよ。ただ、ビッグジュエルだからってことでお父さんが警戒程度はしてるみたいだから知ってただけ」

「あぁ、キッド？　もしキッドが予告状出したら、あたし見に行こっかなー」

「恵子！？　ダメだよ、あんな泥棒なんかに惑わされちゃ！」

な、何というか……。いつものことだけど、本人目の前にしてよく騒ぐよなー。まぁ、知らねぇししょうがないんだけどさ。

それにしても、警部の視野にも入ってたのか、スターサファイア。だったら、警部のその鋭いカンに敬意を表して、次の獲物は『運命

の宝石』にでもするかな？

「……黒羽くん」

「あ？　んだよ、紅子。まだ何か用事か？」

すると紅子は、ちらっとまだ言い合いをしている青子と恵子の方へ視線をやってから、オレにささやいた。

「何でもいいけど、気をつけた方がよろしくてよ？」

「へ？　何に？」

「『運命の青き宝ははるか北の空へ。それを追う白き罪人へ災い降りかからん』……」

「んだよ。また予言だとか言うのか？　関係ねぇだろオレには」

「予言であり忠告よ、黒羽くん。十分に気をつけなさいよ？」

そう言うだけ言って、紅子は自分の席へと向かって行った。

何なんだよ、ったく。相変わらず、わけ分かんねーな。

ボーっと未だ言い合いをしている青子と恵子に視線を向けつつ、計画を練り始める。細かいことは、もちろんちゃんと情報を揃えてからになるだろうけど、あんまり時間はねーな。

確か『ジョゼフィーヌ』の舞台が明後日までだから、明後日の朝までに予告状を出して……ってことは、それまでに計画を考えとかなきゃいけねーってことか。

家帰ったら、即行で寺井ちゃんとこ行かなきゃなんねーなこりゃ。

そんなことをツラツラと考えていたせいで、昼休み終了のチャイムが鳴ってしまった。

あぁ……寝ようと思ったのに最悪。紅子の方をジロリと睨むものの、軽く薄ら笑いを浮かべて一蹴された。

まぁいいや。5限寝るし。

先生が入ってくるのを確認したオレは、夢の世界へと旅立った。

## 銀翼の奇術師１（後書き）

お待たせいたしました！　ペロコです。
あれから、たくさんの「楽しみにしてます」コメントをいただきまして、それに支えられるようにして完成した「銀翼」第１話でございます。お楽しみいただけましたでしょうか？

完全にオリジナルになるので、まじ快ワールド全開です。紅子さんが出せて大変満足しております♪
映画だと樹里さんが説明する『運命の宝石』の由来は、紅子さんにお願いしました。というのも、快斗自体はそこにあんまり関わらないので。

次もオリジナルが続くかもしれませんが、まだ出来ていません。
本当にコレが出来立てホヤホヤだったので。昨日完成したんです（笑）

次の話はいつになるだろう……。本当申し訳ないですね。
実は今、全く違う話も同時進行で考えているので、あんまりペースが上がらず、『夏休みに入ったらヒマになる』とか言っていた過去の自分にビンタしたいです。
楽しみに待っててくださるみなさんには大変申し訳ないんですが、出来次第必ず投稿しますので、今しばらくお待ちください！

では、感想などなどいつでもお待ちしてますので。
公表されてるところに書くのはイヤという方は、メッセでもどうぞ♪アドレスを書いてくださっていたら、そこに返信もいたしますので。

これからもよろしくお願いしますね！

退屈な授業も終わり、すぐさま家へ帰って

「寺井ちゃんとこ行ってくる！」

とだけ叫んで、すぐに家を出た。ビリヤード場を経営してる裏が寺井ちゃんの家だ。

「寺井ちゃん！　今すぐ計画立てるぞ」

「ぼっちゃま、どうされたのです？」

「いいから！　奥借りるぜ！」

そう言って、部屋のパソコンに向かって、ひたすら情報を集める。明日中には今回の計画を全て立てなければいけない。はっきり言って時間が足りないぐらいだ。

「ぼっちゃま、どうされたのです？」

少ししたら、寺井ちゃんも入ってきてまた同じことを聞いてきた。

「前に調べてたスターサファイアがあったろ？　『運命の宝石』。警部があれに目つけてるらしいから、次の獲物、あれにしようと思って」

「なぜそうして危険なものを選ぶんです？」

「スリルあって楽しいだろ？」

「……」

寺井ちゃんが複雑な表情になる。

「んだよ、その目」
「いいえ、そういうところも盗一様そっくりになられて、この寺井は喜んでいいやら、悲しいやら分かりません」
「喜ぶところだろ。――さ、そういうわけだから頼むよ。明日中には計画立てて、明後日に予告状出すつもりだから」
「……それはまた、急がなければなりませんね」
「舞台があさってまでらしいんだよ。だから」

すると、樹里さんのところに飛ばしていたハトが帰ってきた。

「お、お帰り～。ご苦労様。ゆっくり休めよ」

そう言って、足に取り付けていたカメラ（キッド製の音声録音機能付き）を外すと、クルックーと1回鳴いて、小屋へと戻っていった。さっそく映像をチェック！

「……あ。へぇ～？」
「どうされました？」
「うん。樹里さん、舞台終わった次の日に北海道の別荘でパーティーするみたいだね。多分宝石も持ってくだろうし……。無理に舞台やってるときに盗まなくてもよさそうだなーって」

すると、紅子の声が頭の中に響いた。『運命の青き宝ははるか北の空へ。それを追う白き罪人へ災い降りかからん』……。北の空って、北海道のことだったのか。けど、災いって何なんだ？　オレに何が起こるってんだ？

「ぼっちゃま？」
「ん？　何か言った？」

「えぇ、でしたらいつお盗りになるのか、と」
「飛行機の中、とか。誰かに変装してりゃ、きっと少し盗む時間ぐらいあるだろうしな」
「まぁ確かにそうですが、少々楽天的過ぎるのでは？」
「だから、その辺は明日舞台観てくるついでに確かめてくるよ。色々と掴めることもあるだろうし」

明日は『ジョゼフィーヌ』を観に行くつもりだった。下見、というほどのことでもないが、データだけでは見えないような人間性や、それぞれの関係や裏なども調べるためには、１度本人をきちんと見ておく必要がある。

「さようでございますか。では本日はこの辺りにして、もうお帰りになってください。もう外も暗いですから」
「はぁ！？　まだ早いだろ。いいじゃん」
「いいえ、なりません。奥様も心配されるでしょうし」
「……はいはい、わーったよ。今日は帰らせていただきます」

そう言って、パソコンから目を離して立ち上がる。

「お気をつけて」
「誰に言ってんの？　――じゃぁまた明日帰りに寄るわ！」
「かしこまりました」

頭を下げる寺井ちゃんに背を向けて、家へ帰る。

次の日、オレは汐留へ『ジョゼフィーヌ』の舞台を観に行くために学校をサボった。こんな切羽詰った時に学校なんか行って、つまんねぇ授業を受けるほど、オレはヒマじゃない。

まずは素直に――と言うのも変だが――舞台そのものを観る。予告状を出せば、必ず警部は出てくる。この舞台上で盗ることを狙っていたが失敗した……と見せかけんのも悪くねぇし。

あ、へぇ～。『ロミオとジュリエット』もやってんだ、ココ。定番だよな～。パンフレットを見ながら始まるのを待っていると、ようやく『ジョゼフィーヌ』の幕が上がった。

## 銀翼の奇術師2（後書き）

遅くなりましたーーー！　こんにちは、ペロコです。
かなりお待たせしてしまいましたが、『銀翼』第2話ようやく書けました。
『メモリアル～』に掛かりっきりになっていたので、どうしてもこちらが書けなくて……スイマセンでした。夏休み中にもっと書けると思っていたのに（笑）

完全にオリジナル満点で進んでいますが、コナンくんの登場はまだ先になりそうです；　今は3話を書いている最中なんですが、やはりコナンくんの影はないという……。
でも、この小説ではキッドが主役ですから！　大丈夫ですよ、ね？
　このお話を読んでくださってる方はキッドファンが多いと信じていますから、着いてきてくれると信じています！

ということで、まだオリジナル部分が続きますが、楽しんでくれると嬉しいです。キッドの舞台裏を想像するのは非常に楽しいので、この機会に書き切ろうと思っているので。
土曜日か日曜日に更新できると思うので、お楽しみに☆

これからもよろしくお願いします！

舞台が終わった後、オレはすぐに行動した。とりあえず用意していた、ここのスタッフの衣装にトイレで着替え、何食わぬ顔で歩き回る。それだけで、スタッフの間で広がっている関係者同士の噂や関係や弱みなどと、色々情報は入ってきた。

誰に変装すんのが1番いいんだろうなぁ……。

でも、警部のことだから、きっと関係者の顔を引っ張んのはきっと必要最低限の警備のはず。となると、安易に関係者に変装すんのは考えもんかもしれねぇな……。

「オイ、そこの若いの！」

え、オレ！？

「はい！？」

「今日はもう上がっていいって桜井さん言ってたぞ。明日もあんだから、しっかり休めよ！」

「はい！！」

あー、ビックリした～。誰だよ、『桜井さん』って。スタッフのリーダーみたいな感じの人のことなのかな。それにしても、オレの顔見ても何も言わねぇとは。いくら服装が同じだとしてもねぇ……。顔覚え悪いのかな？　オレには考えらんねぇけどな。

まぁ忠告と言うか指示されちゃったし、情報も多少は入ってきたし、帰りますか。寺井ちゃんも待ってるだろうしね。

そして、江古田に帰ってきて直で寺井ちゃんのところに顔を出した。

「ただいま～。何か分かったことある？」

「お帰りなさいませ。１つだけ分かったことが」

会話を交わしながら、昨日と同じパソコンのある部屋へと入っていく。

「飛行機は明後日の便に乗るようです。終わって次の日みたいですね。スカイジャパン航空８６５便、函館行きのスーパーシートに席を取っているようですね」

「うひゃ～。スーパーシート！？　さすが女優さんは違うね！」

「そちらは何かお分かりになりましたか？」

「ん？　あぁ……」

パソコンの前に座りながら、さっきまでのあの噂などを思い出して思わず顔をしかめる。

「？　どうされました？」

「樹里さんってすげぇ色々と恨まれてそうでさぁ……。そりゃぁ大女優となれば色々あるだろうけど、ワガママ女王様タイプみたいだね、彼女。いい噂聞かなかったもん」

「そうでしたか……」

寺井ちゃんまでオレにつられるように顔を暗くする。

「――って、こんな顔してる場合じゃねぇだろ！　予告状だよ、予告状。んー、考えてたんだけどさ。やっぱ舞台で失敗したと見せかけて飛行機ん中で盗ろうと思うのよ。けど、舞台と飛行機の共通点って……」

「共通点、ですか？」

「そう。パッと見は舞台で盗るように見えるんだけど、真の意味は飛行機の中で盗るっていうことが隠されてるみたいな感じにしようと思って」

「そうですか……。寺井には申し訳ありませんが、全く思い浮かびません」

申し訳なさそうな顔をする寺井ちゃんだけど、別に過剰な期待もしてなかったし、気にはしていない。

その時、何気なくもらって来たパンフレットに目をやって……。

――ピンと来た。

「これだ！」

「はい？」

「ロミオとジュリエットだよ。確か、飛行機でのフォネティックコード……。Rはロミオ、Jはジュリエットって言うんだよ」

「フォネティックコード？」

あ、寺井ちゃん知らないのか。

「無線での聞き違いを防ぐためのコードのことだよ」

「そのようなものが……」
「よしっ！　これで決まりだよ。予告状は明日の明け方に自宅に置いとくとして。……自宅の場所は調べられてるよな？」
「はい、こちらに」
と言って、パソコンの画面を指し示す寺井ちゃん。よし、完璧！

『Ｒｏｍｅｏ
Ｊｕｌｉｅｔ
Ｖｉｃｔｏｒ
Ｂｒａｖｏ！
２６の文字が飛び交う中、“運命の宝石”をいただきに参上する
怪盗キッド』

「あ、ヒントでトランプの２が割れたイラスト付けておいたら大丈夫だね。分かる人にはわかるだろうし」
あとは、明日に予告状を届けるだけだ。

## 銀翼の奇術師3（後書き）

ギリギリ約束を守れたペロコです。こんにちは！

いよいよ夏休みも終わりですねー。この夏、うちは一体何をして過ごしていたんだろうか……？

充実、はしてたような気がするんですがイマイチ自信無いですね（笑）

とりあえず、ほぼオリジナル部分は終わりました。次のお話の冒頭で予告状を届けまして、……あとは気の向くままに。（爆）

次のお話からは探偵くんことコナンさんが出てきてくれると思います！　大変長らくお待たせいたしました。

さて、幸か不幸か9月29日に『世紀末』を放送するんですよね……。これは、うちを焦らせるためのものなのか！？　早く書けというものなのか？　だらだら書いてたら『銀翼』もいずれ放送しちゃうよ？　ということなのか？　（考えすぎかもしれないけど）

ではでは、これからもお付き合いくださると嬉しいです☆

## 銀翼の奇術師４

次の日の早朝、オレは眠たい目をこすりつつ、樹里さんの自宅へと向かった。色々準備はしていたものの、やっぱり急な仕事だったせいか疲れが溜まっているようだ。

でも、今日が第１の舞台。失敗は許されない。

朝５時の住宅街は、やはり人気がない。当たり前だけど。

その中の一際大きな豪邸が樹里さんの自宅だった。

「でっけぇ～」

母子２人暮らしで慎ましい生活を送っているオレには、ありえない世界だ。そして、別に目指しているわけでもない世界……。まぁ、どうでもいいや。

ＰＯＭ☆とバラの花束と予告状を出す。玄関口にそっと置き、その場を少し離れてから立ち止まった。

ＰＯＭ☆と再び煙が出て、オレの腕には１羽のハト。ミリーだ。

「ミリー、樹里さんの見張り頼むぜ？」

言いながら、この間使用したカメラを足に取り付ける。

「よし、行け！」

ポンと軽く叩くと、クルックーと１回鳴いて、飛び立って行った。

獲物の持ち主の動きはやっぱり重要だしね。あー、それにしても眠い。帰ったら少し寝るか。
ミリーを見送ってから、オレは帰路についた。

家に帰ってから母さんに気付かれないように2階へ上がり、ベッドへと倒れこむように横になった。そして、多分次の瞬間、オレは寝た。オちた。

7時にセットしているケータイの目覚ましで目を開けた。普段、こんな時間にケータイの目覚ましで目を開けて起きるなんてことはしない。
基本、青子の窓越しの大きな声で起きてないことに怒った母さんが、「起きなさい！」と部屋に入ってくるから。けど、今日は別だ。

起きてすぐ、パソコンのスイッチを入れる。ミリーに取り付けたカメラの映像を見るためだ。どうやらミリーは、玄関の向かいの電線にとまっているようだ。まだ花束が置いてあるままだから、樹里

さんは起きてないらしい。

とりあえずパソコンは点けっぱなしにして、下へと朝食を採りに行く。

「あら、快斗おはよう。どうしたの？　珍しいじゃない、アンタが自分で起きるなんて」

「んー、今日は用事あっから。いただきます」

母さんは何も言わないし、聞かない。オヤジのことも、きっと知っていただろうけど、何も言わない。オレのことも見抜いてて、何も言わないんだろう。

手早く朝食を採って、再び部屋へと引き返す。少しは睡眠時間取ったから、頭は割とスッキリしている。

まだ花束は動いていない。女優さんって朝はゆっくりなんだなぁ……。羨ましい。

あ、出てきた。おー、固まってる、固まってる。あ、中入っちゃった。警察に電話してんのかな？　あれ、もう出てきた。どこ出かけんだ？

「ミリー、頼んだぜ」

映像がブレて、ミリーが樹里さんの乗った車を追いかける。マネージャーさんに電話してたのか。それにしても、電話してスグ迎え

に来るなんてすげぇな。

この方向は……

「米花町、か？」

まさか……というオレの予想が当たったのは、今から15分後に色々と見慣れてしまった毛利探偵事務所が見えてきたときだった。

これ……面白ぇことになりそうだ。

車が停まって、樹里さんと情報で知ってたマネージャーの矢口さんが出てきた。ミリーは再び事務所前の電線にとまり、中の様子を引き続き見せてくれた。

窓が開いててよかった。

## 銀翼の奇術師４（後書き）

毎回遅れてスイマセン！　ペロコです。
久しぶりの更新になってしまいました。なかなか忙しくて、書く時間もなく久々の更新になってます。

さて、やっと樹里さんが動き出してくれました。というか、ココからは映画で見たシーンへと続いていくことになります。ハトの名前は適当です。メス、かな？　多分。誰だ、ミリーって……。

この遅れに遅れている状況を急かすかのように、アニメでは「世紀末」だとか「瞬間移動」だとかやってくれちゃったりするんですよね……。なんですか、急げということですか。
多分、このキッド様祭りに乗っかって、調子よく書けていけると思います（笑）単純なんです。

ですが、目下の急ぎの用件は「メモリアルデー」です（笑）
「中秋の名月」が１４日に迫っているというのに未だ完成してません。急がねば。構成は……少しだけ出来てるかな？　いつもと違ってしんみりとって感じです。秋ですからｖ

ではでは、キッドｓｉｄｅの方も頑張りますので、これからもよろしくお願いします！

しかしまぁ、樹里さんもすごいよな。毛利探偵に相談するって決めるなんてさ。長年オレを追ってくれている中森警部との犬猿の仲だということを知らないんだろうね。多分。まぁ、それは実際に目にしてみないと分からないことだろうけどさ。もともと毛利探偵とオレって接点少ないんだし。

カメラの映像では多少遠いが、探偵くんが（おそらく毛利探偵の）机のイスに座り、向かって右側に樹里さん、矢口さん。で、毛利探偵自身は左側のソファで紙――多分、オレの予告状だろうな――を持っていた。

キッド印の特製カメラは、高画質・良音をモットーにしているから、ラッキーなことに窓も開いていたし、ある程度の話の流れは掴めた。

あと聞き取りにくいところは、読唇術使えば楽勝！

まず、樹里さんによる予告状が届けられた経緯についての説明から始まったようだ。まぁ、基本情報から、ってとこだな。

「今朝、自宅のベランダに大きなバラの花束を添えて置いてあったんです」

それを聞きながら、毛利探偵は予告状の文面を読み上げていた。するとそこに、蘭さんが飲み物を持ってやって来て、樹里さんと矢口さんの2人に勧める。

「それで、いかがでしょうか？　毛利先生……」
矢口さんが毛利探偵に尋ねる。あ、『先生』って呼ぶんだ。
それに答えるように毛利探偵が予告状の1点を指しながら聞いた。
「この『運命の宝石』というのは？」
んだよ、そんなことも知らねーのか。って当たり前だけどさ。
「あぁ、それならこれのことです」
そう言って、樹里さんが宝石箱を取り出して箱を開いてテーブルの上に置いた。
「おぉっ！」
カメラ、ズーム！！　んー、やっぱ生で見ないといけないな。いくら高画質でも、やっぱり生で目の前で見るのとは感動が違うんだもんね。
「スターサファイア、ですな？」
「えぇ。この表面に浮かび上がった3本の線が『希望』、『信頼』、『運命』を表し、交差する『運命の宝石』と呼ばれているんです」
「なるほど。見事なもんですなぁ……」
カメラの性能をもうちょっと上げた方がいいかなと違う方向へ脳が向かっていた間にも会話は進んでいた。
「ブルーサファイアをこよなく愛したジョゼフィーヌに因(ちな)んで、今

回の舞台でも使っています」
「舞台？」
「あ、私知ってます！　汐留に新しくオープンした劇場『宇宙（そら）』で今、『ジョゼフィーヌ』という劇をやってらっしゃるんですよね？」
毛利探偵の方はさっぱりのようだけど、蘭さんはチェックしていたようだ。
「ジョゼフィーヌ？」
毛利探偵が怪訝な表情になるが、探偵くんが素早くその疑問（と呼べるのかどうか……）に答えた。
「ナポレオンの最初の王妃だよ。バラのコレクターとしても有名なんだよね」
さすが探偵くん。スラスラ答えたよ。この様子だと、バラの花束を置いた意味も分かってんだろうね。
「そうよ、ボウヤ。よく知ってるわね」
「つまんねぇことばっか知ってるんですよ」
ガハハハと豪快な笑い声をあげる毛利探偵だけど、たった今その人からフォロー入れてもらったの、どこのどいつだよ。
再び予告状を手に取り、ぶつぶつ唱える。すると……。
「……ん？　樹里さん！　今、あなたがお出になっているその劇場で、『ロミオとジュリエット』を演（や）りませんでしたか？」

あれ、この流れは……。

「えぇ、私は出ておりませんが『宇宙』のこけら落としで……。それが何か？」

「分かりましたよ！」

何をどう分かったのか、質問の答えを聞いて、毛利探偵は満足そうな笑みを浮かべた。

## 銀翼の奇術師５（後書き）

大変お待たせいたしましたー！　ペロコです。
久しぶりの更新となってしまいました。前回投稿したの、いつだって話ですよね。本当にスイマセン。

ようやく、映画でのシーンへと突入いたしました。前座が長すぎることも原因なのかな、と。ようやく、探偵くんが出せて大変満足しています。が、基本的には後ろ姿しか見えないんですよね。あのカメラからでは。
声を聞かせるために、無理矢理ではありますがかなり高性能なカメラということにさせていただきました（笑）まぁ、怪盗さんならそれぐらいのことやってのけそうなんで。

さて、次は……毛利探偵の推理披露に始まり、その後の怪盗さんの行動を再びオリジナルで、ということになるかと思います。
……思います、というのは、まだ書けてないからでして（汗）次はいつになるやらって感じです。本当に忙しくて。
来週更新を目指して頑張りますが、達成できない可能性が非常に高いです。８０％ぐらいは達成できない可能性があると思っていただければ。
出来次第必ず更新いたしますので、しばしお待ちください。

ではでは、こんな亀更新ではありますがこれからもよろしくお願いします！

## 銀翼の奇術師6

バン！　と予告状をテーブルに叩きつけて、立ち上がる毛利探偵。もっと大事に扱ってほしいもんだよ、コレ。

「キッドがよこしたこの予告状には、3つのWと1つのH……つまり！　『誰が・いつ・どこで・どうやって』が示されているのです」

「なるほど……」

って樹里さんは感心してるけど、ハッキリ言ってオレは不安だ。

「まず、『誰が』……これは言うまでもありません。キッドです」

まぁそうだよね。

「次に『どこで』。『ロミオとジュリエット』を上演した劇場『宇宙』の舞台上です！」

……え？

「そして『いつ』。予告状にある“ブラボー”からして、観客から“喝采”を受ける時」

おいおい？

「最後に『どうやって』……。“ビクター”は“征服者”。これは、ナポレオンのことで、キッドが変装する人物を示します」

ちょ、ちょっと待て待て。

「さらに予告状にあるトランプ！　その２つに割れたトランプは、勝利のＶサイン！」

すごい想像力だな……。何かもう、あっぱれって感じ？

「つまり怪盗キッドは、今あなたが出演している『ジョゼフィーヌ』の舞台の、喝采を受けるまさにその時！　ナポレオンの姿でその指輪を盗みに現れるのです！」

「ブラボー！　ブラボー、毛利さん！」

えぇーーー。いや、確かに筋は通ってなくもないけどさ、まだあるでしょ。続きがさ。

「ねぇ、おじさん。この『２６の文字が飛び交う中』ってどういう意味？」

そうそう！　さすが探偵くん。

「バーロォ！　その上の英語の文字を数えてみろ！　ロミオ、ジュリエット、ビクター、ブラボー……全部で２６文字だろうが！」

もう何も言わねぇ。知らねぇ！

「ところで樹里さん。『ジョゼフィーヌ』の舞台はいつまで？」

「今日が楽日です」

「となるとキッドが狙うのは……」

「あれれぇ！？」

あ、毛利探偵がコケた。

「今度は何だ！？」
「だっておかしいよ！　ホラ、２２文字しかないんだもん！」
「んなはずねーだろ」
「うぅん。私も数えたけど、ビックリマークを入れても３文字足りないよ」

蘭さんも加わる。

「そ、それはきっとキッドが間違えたんだよ」

オイオイ。ちょっと待て。んなバカなことするわけねぇだろ。オレはわざわざ予告状を送ってんだ。そんなミスするはずがない！

「と、とにかく！」

ウォッホンと咳払いをして、毛利探偵は口を開いた。

「キッドが今夜、その宝石を狙ってくるのは間違いありません！」
「はい、分かりました。そこでご相談なんですが……もちろん警察にはこれから参りますけど、今夜劇場へいらしていただいて、キッドからこの宝石を守っていただけないでしょうか？」
「いいでしょう！　不肖この毛利小五郎、美人の依頼は断ったことがありません」

ハハハ。分かりやすい性格だ。

まぁコレで毛利探偵が来ることは分かったし……となると、今も

予告状に集中してる探偵くんも来るってことで。
ミリーにはこっちに戻ってきてもらって、しっかり休んでもらわねぇとな。

「さーて、それでは参りますかね」

パソコンを消し、小さく呟いてから立ち上がった。

まずは寺井ちゃんのとこに行って、最終作戦会議からだな。あー、忙しくなりそうだ。

## 銀翼の奇術師６（後書き）

本当に遅くなってしまい、申し訳アリマセンーーー！！　ペロコです。
大変お久しぶりでございます。と毎回言ってしまう自分が悲しいです。

「銀翼」第６話となります。とりあえず毛利探偵の推理ショー（？）はこれにて終了。次からはオリジナル部分というか、映画内における空白の時間ですね。まだ書けていませんが……。

一体「銀翼」は何話で終わるんでしょうね？　このペースで書いていくと。年内に終わるかどうかすら怪しくなってきました。
ところで。
「キッドｓｉｄｅ１」にて「銀翼」を読みたいと仰って下さってた皆様に質問があります。
というのも、一体どのシーンの「キッドｓｉｄｅ」が見たいと思っていたのか、というのが気になりまして。
映画内における繋ぎのオリジナル部分なのか、それとも探偵くんとの対峙のシーンなのか、とか。一応その希望の高かったシーンは力を入れて執筆したいと思っておりまして。

緊急アンケート！　もう遅い気もしますけどね。
『「キッドｓｉｄｅ」で読みたい「銀翼」の１シーンを教えてください！』
もう途中まで進んでしまってますが、今からでも修正は効きます。
たくさんのお答えお待ちしております！

では、これからもよろしくお願いしますね。

## 銀翼の奇術師７（前書き）

まだまだ、「銀翼」で読みたいと思った１シーンのアンケートはお待ちしております。

そのシーンにたどり着くまでどれぐらいかかるか分かりませんが、気長にお待ちくださいませ。

ではでは、久しぶりに更新した「キッドｓｉｄｅ」、お楽しみください。

「おっはよー、寺井ちゃん！」
「おはようございます、快斗坊ちゃま。本日もお元気そうですね」
「今日は気合い入れねぇと、こっちがやられちまいそうだからな！」

何たって、あの名探偵が来るんだから。

家を出てから、まっすぐ寺井ちゃんのところに来た。まぁ、仕事当日だし、下準備はきちんとしねぇとな。

「坊ちゃま、何だか楽しそうですよ？」
「んー？　いやぁ、そりゃぁ楽しくもなるっしょ！　探偵くんが今回は絡んでくるんだから」
「探偵くん、と仰いますと……。あぁ、あの少年ですか？」
「外見はな」
「はい？」
「まーいいから、早く作戦立てちまおうぜ」

そろそろ樹里さんも警部のところに行ってるはずだ。今頃、警部の予想が当たったことに興奮しながら、気合いを入れてる頃だろう。

「さて、当座の問題は、誰に化けるか、だな……」
「えぇ、一応一通りの基本情報は仕入れておりますが、さすがに舞台のセリフまでは分かりませんので、役者の方に変装するのは難しいかと」
「そーだな。警部のことだ。役者だろうと、問答無用でチェックす

るだろうし、関係者に化けんのはマズイな」

言いながら思いついた。

「なぁ、工藤新一に変装すんのはどうかな？」

「工藤新一、ですか？」

寺井ちゃんは目を丸くする。

「まぁ……彼は現在行方不明ですし、……幸か不幸か坊ちゃまによく似ておられますし」

「髪いじるだけだしな」

変装っていうより、気分で髪いじるだけって感じになっちまうけど。

「ですがよろしいんですか？　毛利探偵もいらっしゃるのでしょう？　つまりは、彼の幼なじみの彼女も来られるのでは？」

「大丈夫だって！　それよりも問題は、警部のあの極度の探偵嫌いの方だし」

幼なじみどころか、本人の目の前なんだしな。それよりも警部の探偵嫌いの方がやっかいだ。

警部が『工藤新一』を現場に入れるなんて、許すわけがねぇことは目に見えてる。正面から行っても、追い返されるのがオチだ。

「こうなったら、あの恰幅のいい警部さんを使うしかねぇか？」

「推薦してもらう、ということですか？」

「あぁ。だって、警部の『工藤新一』に対する印象は最悪なんだぜ？　ほら、時計台の時以来だからさ」

「あぁ……それはそれは悪いでしょうね」

寺井ちゃんが遠い目になる。

もともと、キッドの現場に関係者を入れることすら渋っていた人だ。部外者、まして自称探偵で、何の断りも無くいきなり乗り込んできて主導権を奪うヤツなんて、論外だったろう。絶対、警部の探偵嫌いは名探偵が拍車をかけたに違いない。

2人して遠い目になってつらつらと考えていたが、

「よしっ！」

と空気を変える。

「筋書きはこうだ。毛利探偵のところに相談に行った樹里さんの話を聞いて、蘭さんが、工藤新一にメール（もしくは電話）をした。で、近くまで帰ってきたついでに、キッドの現場に行ってみようと、警視庁を訪れることにした」

「……それが最も妥当でしょうね」

「それじゃ、そのためにも……」

と、座っていた机から立ち上がって、店の裏へ行き姿見の前でワックスを手に取り、髪型を変える。

「あ～、やっぱり楽だわ。名探偵に化けんの」

呟きながら、寺井ちゃんのところに戻った。

「……これは驚きました。坊ちゃまと似ているようで、少し違うのですね。雰囲気というか、纏っている空気のようなものが」
「あぁ、そこだけは気をつけねぇとな」

と、絶対彼は浮かべることはないであろう、怪盗特有の笑みを浮かべた後、

「じゃ、行ってくる」

と言い残し、寺井ちゃんのところを出て警視庁へと向かった。

## 銀翼の奇術師7（後書き）

一体何日ぶりなんだろう……と気が遠くなりそうなペロコです。こちらでお会いするのは大変お久しぶりでございます！　先月って更新したっけ？　と記憶が怪しくなるほど更新していないことに気付き、愕然としております。

さて、久しぶりに更新した今回のお話では、とりあえず工藤新一に化けると決めるまで。をお送りいたしました。次回は、警視庁編……ぐらいになると思います。

快斗と新一って、似ているようで実はどこか違うんですよね。万人ウケする（ように見える）タイプの快斗と、孤高の戦士タイプの新一。姿形は似ていても、その空気や雰囲気は違うものなんだろうと信じております。

ちなみに、新一の服装ですが、今回は工藤邸に侵入するという強硬手段に出ることはなく、私服なので快斗の持ち物、ということにさせていただきます。まぁ、足がつくような特注みたいな感じのものではなく、どこにでもあるような服装で、という意味でですが。あの映画の服装をイメージしていただければなと。

さて、次回の更新も今月内に出来るように頑張らせていただきます！前書きで書かせていただいたアンケートの方も、まだまだお待ちしておりますので！

では、これからもよろしくお願いしますね。

## 銀翼の奇術師８（前書き）

警視庁内の描写が出てきますが、もちろんペロコは入ったことがありませんので、勝手な想像の下での描写となっております。

事実と異なる場合があると思いますが、そこだけはご了承ください。

では、お楽しみいただけたら嬉しいです。

泣く子も黙る天下の警視庁を訪れる、日本警察の救世主に変装した確保不能の大怪盗。今思うと、すごい組み合わせだななんて他人事のように思ってしまう。

「まぁ、いつでも盗聴させてもらってるけど、実際にこうやって潜入することは滅多にないんだもんね」

ポツリと呟きながら、警視庁の中へ入る。

右手にある受付を素通りし、その横にある案内板を目だけでチラリと見た後、奥にあるエレベーターに乗った。向かう先は、捜査一課である。

それにしても、さすが名探偵。青子も顔パスだけど、名探偵もか。しばらく顔見せて無くても大丈夫なんだな……。受付の女の人がビックリしたように見てたけど、いつ以来なんだろうなぁ、名探偵が警視庁に入るの。

チンと音がして、エレベーターの扉が開く。降りて、右へ曲がって左奥の部屋だ。

一応ノックしてから中に顔を覗かせた。大方が出払っていて、中はガランとしている。その奥に、いつでも帽子を被っている警部の姿を発見し、中へ入って扉を後ろ手に閉めた。

カツカツと靴音を響かせながら、資料を睨みつけるようにして見ている警部の元へと歩み寄る。

「お久しぶりです、目暮警部」

こんな感じでいいのかな？　と不安に思いながらも、そのような態度は全く出さずに声をかけた。

目を上げた警部の顔が驚きと嬉しさで溢れている。

「おぉー！　工藤くんじゃないか！　久しぶりだなぁ。今日はどうしたんだ？　何かまた事件か？」

それなら警部の耳に入るほうが先じゃないかと思ったけど、名探偵の場合、逆の可能性も高いか。

「いえ、今日は小耳にはさんだことがありまして……」

「何だね？」

「キッドの予告状が出たと蘭から聞いたので……あの時みたいに参加したいなと思ったんですが」

「キッドの予告状？　あぁ、そういえばさっき戻ってきてた千葉くんも言っとったな。二課が大騒ぎしとるって……。参加したいって、キッドの現場に、君がかね？」

やっぱり大騒ぎだったか。

「はい。さすがにあの時のようにヘリでいきなり押しかけるのもどうかと思ったので、目暮警部にと思いまして」

「うーん……。中森くんは……まぁ、何と言うか気難しい人だからなぁ。君がどうしてもと言うのなら、今から二課に行くか」

え、今から？　いや、いいんだけどね。行動力があるのはいいことだしさ。

「警部、よろしいんですか？　何か見ておられたのでは？」
「ん？　これかね？　いや、急な出張が入ったもんでね。その連絡の紙を見ていたんだよ」
「そうだったんですか。――どちらへ？」
「札幌だよ」

そんな会話をしながら一課を出る。札幌かぁ……、函館と近いっちゃぁ近いけどなぁ。

「遠いから大変ですね」
「まぁねぇ。札幌に行くのは久しぶりなんで楽しんで来るよ」
「はぁ……」

それでいいのか、警部さん。

「さぁ、到着だ。一応中森くんにはしっかり言うつもりだが、許してくれるかは分からんからな」
「はい、ありがとうございます」

コンコンとノックしてドアを開けた、その瞬間。

「うぉぉぉっ！！」

というダミ声が響いて来て、オレも警部さんも半歩下がった。

防音してあるの、正解だな。特に二課では。

「ん？　目暮のタヌキじゃないか！　何でキサマがここに？　それに、その少年は……」

オレに気付いた中森警部に会釈をする。

「お目にかかるのは初めてですよね、中森警部。初めまして、工藤新一です」

そう言って、握手するために右手を差し出した。

そしたらまぁ、見事に表情が変わったわけで。何て言うか……屈辱と怒りの混ざった顔？

結構見ものだったな〜。なかなか見れるもんじゃないし。

## 銀翼の奇術師８（後書き）

みなさま、こんにちは！　大変寒くなってきましたね。ペロコです。
久しぶりに２週間連続で更新することができました。うは～、久しぶりすぎて違和感感じるよ。危ないな。

さて、今回もオリジナルシーン。怪盗さん、警視庁訪問編。けど……終わらなかったーッ！！
実際の予定では、きちんと中森警部に挨拶も済んで、一応の了解をもらうところまでいくつもりだったのに……。どこだ、どこが原因なんだ！？
あれか、ムダに分からないのに警視庁内の描写をしたせいか！？
むむむ……。ということで、次の話もオリジナルになると思われます。だらだらと続いてしまって申し訳ないです。
ちなみに、目暮警部の出張は、もちろん映画に繋がってきますので（笑）でも、実際に接触するということではないので、出番はココだけになるかもしれません。

では、また期間が空いてしまう可能性が高いんですが、こんなうちに感想やご意見などいただけたら嬉しいです。
これからもよろしくお願いしますね！

中森警部は、いい印象が全く残っていない『工藤新一』に対しての扱いがとにかく酷かった。一応差し出した右手を取ってはくれたものの、1秒するかしないかで手を離すほどだ。これじゃぁ、『握手』じゃなくて、単なる『接触』に過ぎない。

「どういうことだ？　何でこの少年が二課にいるんだ？　管轄は一課なんだろ、目暮？」

目暮警部に向き直り、半目になって睨みつけるように問う。

「工藤くんはまだ高校生だから、管轄も何も無いんだよ。我々が困った時に、どうしても頼ってしまうだけでね」

あらら、自覚してたんだ？

「それで今日はだね。怪盗キッドから予告状が届いたと聞いて、工藤くんも現場に参加した」

「ダメだ」

早っ！　最後まで言ってないし！！

「中森くん。何も捕り物に参加させろと言っとるわけでは」

「部外者が立ち寄るようなもんじゃねぇんだ。ダメなものはダメだ」

「中森警部、お願いします。決してお邪魔になるようなことはしませんので」

「ダメだ」

警部の態度は変わらない。『ダメだ』の一点張り。相変わらず探偵嫌いだなー。

「中森くん、現場に連れて行くだけでもダメかね？　そこらの単なる野次馬のような高校生じゃないんだ。中森くんの手を煩わせるようなことは決して無いはずなんだしだねぇ」

「お願いします！」

そう言って頭を下げる。すると、ちょっとだけ警部が詰まった。

よし、もう一押し！

「中森警部のキッドに対する力の入れようはもちろん存じています。前回、半ば無理矢理のように指導権を取ってしまったことは反省しています。決してお邪魔はいたしません！　お願いします！　今後の勉強のためにも、現場に行かせてください」

頭を下げつつ、現在本当に名探偵が覚えているかすら怪しいあの時計台のことも謝っておく。……って、何でオレが！？　まぁ、警部を説得するためならしょうがないけどさー。

すると、目の前の警部の態度が少し柔らかくなったことが感じられたけど、すぐには頭を上げずにいた。

「……そこまで言うなら、連れて行ってやっても構わん」

バッと頭を上げ、警部の顔を見る。

「ただし！　絶対に我々の邪魔だけはするなよ！？」

「はい！　ありがとうございます」

目暮警部が、横でニコニコしながら

「中森くん、よろしく頼むよ」

と、すっかり保護者のようだ。捜査一課の警部さんがこんないいおじさんで大丈夫なのか？

呆れて警部さんを見ていると、気合いを入れた中森警部が大声で言った。

「よーし、そうと決まれば早く行くぞ！　今日こそ、あのキザな泥棒を我々の手で捕まえて、監獄にぶち込んでやるんだー！！」

「オォーー！！」

うぉっ！　相変わらずの張り切りっぷりだね、警部。でも、残念だね。今日は盗む気無いからさ。

「オラ、探偵も来い！　昼飯は途中で食わしてやっから、パトカーで向かうぞ」

「え、今からですか？」

いくら何でも早すぎじゃね？

「中森くん、少し早すぎないかね？　工藤君も準備などして来ておらんだろう？」

「えぇ、まぁ……」

「だから、とりあえず家に帰してあげてから、もう一度来てもらえばいいんじゃないかね？　その予告状が届いたという人も、まだ予

定が合わないかもしれないじゃないか」
「……」
「中森くんなら、直前に行ってもしっかり警備が出来るんだろう？」
「もちろんだ！」
……うわー、褒め殺しだよ警部さん。上級テク、なのか？　それとも日常茶飯事？

まぁ、こうしてとりあえずは家に帰してもらえることになった。
寺井ちゃんと今夜の計画を最終確認して、諸々の準備を仕込み（でも、見た目には変わらない程度に）（どうやってかはもちろん企業秘密）、昼ごはんを食べてから、再び中森警部のいる警視庁へと向かった。
何度も警視庁に行く事になるとは思わなかったけど、今のオレは名探偵。これが、当然なのかもしれねぇな？

## 銀翼の奇術師９（後書き）

みなさま、お久しぶりでございますー！！　ペロコです。
あ～あ、って感じでまた投稿間隔が空いてしまいましたね。スイマセン。

さて、今回は前回書ききれなかった中森警部の説得編となりました。目暮警部を仲介役として、何とか説得に成功した怪盗さん。さり気なく時計台のお話も練りこんでみました。新一さんは絶対知らないと思うので、ね。

次回は……映画のシーンまでいけたらいいな～と思ってみたり。こんなスロー更新をあざ笑うかのように、今週のアニメでは何と空中歩行のお話を放送するんですよね～。困った。何だ、これは！　早く書けという天からの導きか！？
年内にもう１話書けたら褒めてください（笑）
あ、メモリアルデーはクリスマスは完成いたしました♪　更新をお楽しみに☆（↑キッドｓｉｄｅが遅れた原因）

ではでは、感想などお待ちしておりますｖ
これからもよろしくお願いしますね。

## 銀翼の奇術師１０

さて、読者のみなさん。いきなりですが、ここでクイズです！

今、オレはどこにいるでしょーか？！　チッチッチッチ……。ブッブー、時間切れです。

正解は……『パトカーの中』でした！　送ってくれるのは非常にありがたいんだけど、ハッキリ言って居心地は最悪です。キッドがパトカーに普通に乗ってんだぜ？

今オレの正体を明かしたら、助手席に乗ってる中森警部あたりが発狂しそうだな。……うん、それはそれで面白そうだけどなー。やっぱり計画の方が大事だし……事故が起きちゃ大変だし。あんまりからかいすぎんのもよくねーよな。青子が心配しちまうし。

なーんて、真面目な『名探偵』の表情の下では凄い事を考えながら、昨日も来た汐留へと車が走る。あーあ、２回も連続で同じ舞台見なきゃなんねーのか……。つまんねぇ。

「キッドのヤツ……。相変わらず意味の分からん予告状作りやがって……」

中森警部が助手席でいきなりボヤく。ビックリしたー。いきなり名前呼ばれたから、正体バレたのかと思ったじゃん！

手にオレの予告状のコピーを握り締めて、文字通り穴が開くんじゃないかってぐらいの眼力で睨みつけつつ唸るように言うもんだから、怖い。

多分、目からビームが出るなら、今頃そのコピーは真っ黒になってるだろうなと遠い目になる。警部の執念深さと気合はいつも怖い。怖すぎる。でも、だからこそ『確保不能』の怪盗キッドを長年に渡って追いかけてこられるんだろうな～なんて時々思う。

親父の代から追いかけてるんだから、もう２０年近くになるのか……。やっぱりすごいな、警部。その信念と、寄せられる一定の信頼はオレにはくすぐったくなる時がある一方、追いかけてくれるというどこか嬉しさもある。

こういう、まっすぐすぎるところが短所であり、長所でもある警部、好きだぜ？

……カーッ！！　何考えてんだオレは！　汐留に着くじゃん。もう探偵くんたちも来てるかな？　絶対にオレがキッドだって気付くはずだし、マークされることは必至だな。今日はある意味遊び半分とはいえ、気は抜けない。

「ホレ、着いたぞ。降りろ」

劇場『宇宙（そら）』はとても広く、鬼ごっこには持ってこいの場所だな♪

警部の後に続いて、控え室の前へと歩く。

「ここで待ってなさい。いきなり部外者が入るのはマズい。ワシが入れと言ったら入ってくるんだ」

「はい」

軽く頷いて、まずは中森警部が中に入る。

「皆さん、お揃いですな！」

「中森警部！」

「どうも、毛利さん。お久しぶり……です！」

「いやぁ、その節は……どうも！」

「いえいえ、こちらこそ！！」

……何やってんだ、あの2人？　早く中に入れてくれよ。探偵くんの驚く顔が見たいんだよ。

「そうそう、今回は特別に捜査協力をしてくれる人物を連れて来ました。まぁ私は必要無いと言ったんですが、目暮の野郎が……あ、いや、目暮警部が強く推すものでね」

きた！！

「入りたまえ」

コツコツ、と足音をわざと響かせてゆっくりと入り口の方へ歩く。

「え！？」

驚いたように響くのは、蘭さんの声かな？　入り口の前に立ち、一言。

「どうも、工藤新一です」

あー、探偵くん目がまん丸だよ。やっぱり当たり前だけど一発で見破られるね。本人だし当然か。

## 銀翼の奇術師１０（後書き）

みなさま、こんにちは。ペロコです。

ようやく！！　本当にようやくと言った感じでしょうか。
探偵くんとの接触部分に到達しましたーーー！！
ありがとうございます、ありがとうございます。１０話目にして、ようやく接触というのがいかにのんびりと書きすぎたかを表しているのですが。

緊急アンケートにて、この場面を見たい！　と言われた方がいらっしゃいましたので、次回はそこをたっぷりとお送り出来ればなと。
まだ書けていないんですが、素の快斗丸出し＆中森警部による頬っぺたつねり初体験をじっくりと書きたいと思います（笑）

今回はちょっと短めでしたが、ここで切りたかったので。スイマセン。
来年、しっかりと更新していきたいと思います。春辺りにはまたキリのいいところにいかないと、のんびりしすぎですよね……。執筆スピードを上げないと！
ただ、テストが1月末からあるので、その辺りになるとちょっと……と今から弱気。

とにもかくにも、今年も1年お世話になりました！　たくさんの方に感想をいただいて、本当にありがとうございます♪
少しずつ少しずつ、自分のペースで書いていこうと思うので、来年もよろしくお願いしますね！

「新一！？」
「何だ、コイツか……」
「工藤新一って、あの有名な高校生探偵の！？」
その通り。……本物はね。
探偵くんがオレを指差している。人に指を向けちゃいけないんだぜー？　教わんなかったのかな？　あ、でも名探偵はいつも決めポーズで指差しちゃってたっけな？　『真実はいつも一つ！』ってな。
「誰だっけ？」
「何を言ってるんですか！」
「蘭お姉さんの恋人よ！」
この子たち……前にエッグの時に一緒にいた子か。相変わらずマセてんなー。アハハ。
「違うわよ！」
「ダンナよ」
「園子！！」
おーおー。顔赤いな。
「怪盗キッドだ！！」
ニシシ。そうだよ～ん。さっきから『か』ばっかり連呼してたの

はオレの名前だったのか……。まぁ、ここにいるメンバーでオレのことが分かるのは博士さんと、灰原って子と、探偵くん本人だけだしね。

「この人、新一兄ちゃんじゃない！　キッドが化けてるんだ！」

「キッドが！？」

相変わらず指差したまま続けた探偵くんに、警部が反応し振り返ってきた。うぉー、危ない危ない。笑顔を引っ込めて違うと軽く両手を挙げる。

「何でそんなことが分かるんだ？」

毛利探偵の鋭い指摘！　さぁ、どう答える？

「だってオレがホントの……」

「ホントの……何なんだ？」

「あ、いや、エヘヘ……」

そりゃー、言えるわけねぇよなー。この状況で。

「はっはっは……。なるほど、その可能性も無いとは言えないな……」

え、ちょっと待ってよ警部。目が怖い。そんなに迫ってこないで！！

「ふんっ！！」

気合いを入れて、オレの頬っぺたを……

「イタタタ……ひょっほ！　やめへふだはい、中森へーぶ！」

これかー、警部の特技のキッド見破り術！　痛い痛い痛い！！
あぁ、警部の部下たちの苦労がよーく、よ～く分かったよ。いつも苦労してたんだね！　ゴメン！　オレの変装が完璧なせいで！

「よーし、間違いない！　本物だ！」

違うけどね。

「ついでに皆さんの顔も引っ張らせてもらいたいところですが……」
「えーーっ！？」

そりゃイヤだよな、こんな風に引っ張るって今目の前で見てんだし。

「いや、その必要は無いでしょう……。私の勘では、キッドはこの中にはいません！」

いるって……。どっから来るんだ、その妙な自信は。相変わらず面白いなー、毛利探偵。

「それに、キッドを捕まえる秘策はちゃんと考えてあります！」
「ほほぅ……」

ほほぅ……。警部の発言にオレの心情が重なる。気になるね、その『秘策』ってヤツ。毛利探偵が気合を入れて考えてくれたんだろうし。

「それじゃ、その秘策とやらを伺いましょうか。――牧さん、よろしければ他の皆さんには席を外していただきたいのですが……」
「構いませんわ、警部。もう仕度も済みましたし」

おっと！　オレも言っとかないと。

「あ、すみません！　ボクはボクのやり方でやりますので……」
「上等だ！　探偵ボーズに用はねぇ！」
「へへ……」

名探偵が自分のことを言うときって、たぶん大人相手だったら『ボク』になるよね……。大人には猫かぶってそうだしなー、名探偵。
それにこう言っておけば、絶対に警部たちと一緒に行動せずに済むしね。今回はとりあえず、探偵くんの気を引いておくのが最優先、だからね。毛利探偵にも拒否されてよかったよ。というか、信頼されてないのかな？　あの口調といい、オレが室内に姿を現した時の態度といい。

ということで、出演者の人たちと一緒に楽屋を追い出されるようにして出た。

「それじゃぁ、ボクたちはこれで……」
「舞台楽しみにしておりますぞ！」

と、出演者の人たちはリハーサルでもあるのか、全員立ち去ってしまった。

「ねぇ、ちょっと！」

ん？

「こっちに帰ってたんなら連絡ぐらいしてよね！」

こっちに帰ってたって……どっか行ってることになってんのか？

名探偵も心配かけちゃダメだろー。

「悪（わり）い、悪（わり）い！　オメーの驚いたキュートな顔が見たくてな！」

「キュ……！？」

「おーおー。のっけから言うねぇ……」

え、名探偵の代わりに言ったつもりだったんだけど……。普段は言ってなかったのかな？　蘭さん、赤くなっちゃったよ。

普段の探偵くんの口調とか言い回しからすると、何となくこれぐらいサラッと言ってそうだなと思ってたんだけど……。いつものやつは天然キザだったのか？　それとも、恋愛ごとには奥手なのかな？

どっちにしても、これぐらい言ってやんねーとダメだぞ、名探偵。

ま、幼なじみに弱いことは、オレも人のこと言えねぇけどな。

## 銀翼の奇術師１１（後書き）

みなさま、お久しぶりです！　ペロコです。
……ちゃんと生きてますよー（笑）

さて、年末以来の更新となった「キッドｓｉｄｅ」ですが、本当に亀更新で申し訳ないです。
ただ今ペロコは絶賛テスト期間中ということで、ハッキリいって全く時間がありません。さすがに１ヶ月何の更新もないのはペロコ自身が辛いので、こうして更新させていただきましたが……。次がいつになるかは不明です。

とにもかくにも、映画のシーンは続きます。しばらくの間は。
今回は希望のありました「快斗がコナンの前に現れたシーン」ということで、これで１話を使わせていただきました。実は快斗さん、ニマニマと笑っているんですよね。コナンくんが「キッドだ！」と指摘した時に。そして警部が振り返った瞬間困った顔をするという見事な策士です！　（笑）

ペロコは毎日のように「銀翼」のサントラを聞いて何とか気分を盛り上げております。というのも、全く執筆スピードが上がらなくなっているからなんですよね。軽いスランプ状態です；

次のお話がいつ更新できるのかは分かりませんが、２月は頑張れたらいいなーと思います。節分話もまだ書けてないよ、ペロコさん（汗）

これからも頑張るので、応援よろしくお願いしますです！

## ペロコからのお詫びとお知らせ

えー、大変お久しぶりです。ペロコです。

小説の途中に登場するのは反則かと思うんですが、あらすじだけでは見ない方もいらっしゃるかもしれないと思いまして、こうして登場させていただきました。

あらすじを読まれて、この話を読んでおられる方はもうご存知のように、この小説の執筆を一時中断したいと思っております。

「キッドｓｉｄｅ」は、皆様からのリクエストに応えて、第２弾ということで連載してきましたが、今のペロコの状況からして、執筆を続けるのはかなり難しい状況になっております。

というのも、かなり学校での生活が忙しくて、執筆時間が全く取れておりません。前回更新したのは……１月、ですか！？　相当マズイですよね、コレ。

この「キッドｓｉｄｅ」は、ペロコにとっても思い入れの深い作品で、高校生の時からずっとこの話と向き合って過ごしてきたので、途中で中断というのはかなり辛いのですが、今ペロコに時間を作る余裕はありません。

現に、こうしてコナンノベルズを覗くのも久しぶりですし……。コメントもいただいているのに、お返事が出来ていなくてスイマセンでした！　この後お返事はさせていただきますので。

執筆を停止するのは「キッドｓｉｄｅ」に限らず、今現在連載している「メモリアルデー」もその中に入ります。そちらはそちらで、同じような内容のペロコからのお詫びということで、書かせていただいておりますので。

まぁ書いてる内容は大体同じなので、別にどれかを読んでくださってたらいいのですが。

久しぶりに更新されてる〜！！　と楽しみにこのページを開かれた方には大変申し訳ないことをしたなと思っているのですが……。

本当にスイマセン！

また、復活できた際には、お付き合いくださるとペロコは大変嬉しいです。未定なんですが……。夏ぐらいまでは無理かと思います。多分。

全てが未定なので、今後どうなるかは分かりませんが、このまま終わりという形にはしたくないなとペロコ自身が思っておりますので、これからもたまに覗いてくださると嬉しいです。

では、このような反則の形で挨拶をしてスイマセンでした。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0271e/

---

名探偵コナン～キッドｓｉｄｅ～2

2010年10月8日13時05分発行